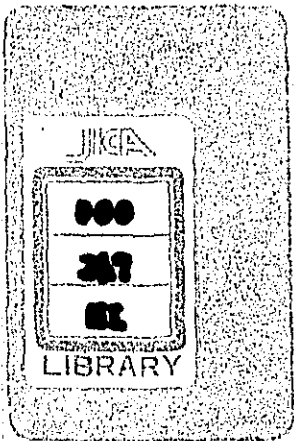


海外研修視察報告書

海外教育実施高校教師レポート

昭和49年12月10日



国際協力事業団

(Japan International Cooperation Agency)

国際協力事業団		
受入 月日	'84. 8. 20	000
		24.7
登録No.	13188	EI

ま え が き

国際環境の変化と国内外に諸問題の多い時代が来たように思われます。このような時に日本人が持っている能力を海外で伸ばすべき海外発展の時代であるとも思われます。

特に次代を形成する青少年に対して広く世界の歴史や現状に目を開かせ、従来通り一層海外発展思想の高揚を図る為の教育を行うことも極めて重要なことであると考えております。特に当事業団におきましては、その一助として例年全国の海外教育実施高校の中から、高校教師を選抜して南北米の諸国に約一か月間研修のため派遣しておりますが、今年度は九名の高校教師を派遣しました。この研修の主な対象は、それぞれの国における一般的な産業、経済、文化、教育事情及び日本人の海外での活躍状況等であります。

教師団一行は去る7月21日日本を出発し8月14日無事帰国され海外研修のレポートが提出されましたのでこれ等を整理等し若干の参考資料を付し報告書にまとめました。

旅行日程にゆとりがなく短期間の研修旅行でありましたが諸体験談やご意見或いは見聞などが執述されており、これからの海外教育の在り方や普及の諸活動等に資する点があると思われます。

この報告書を発行するにあたり、今日まで海外研修の体験諸先生方及び全国の海外教育実施高校の諸先生方の今後一層のご理解とご尽力とをお願いしてやみません。

JICA LIBRARY



1028128[5]

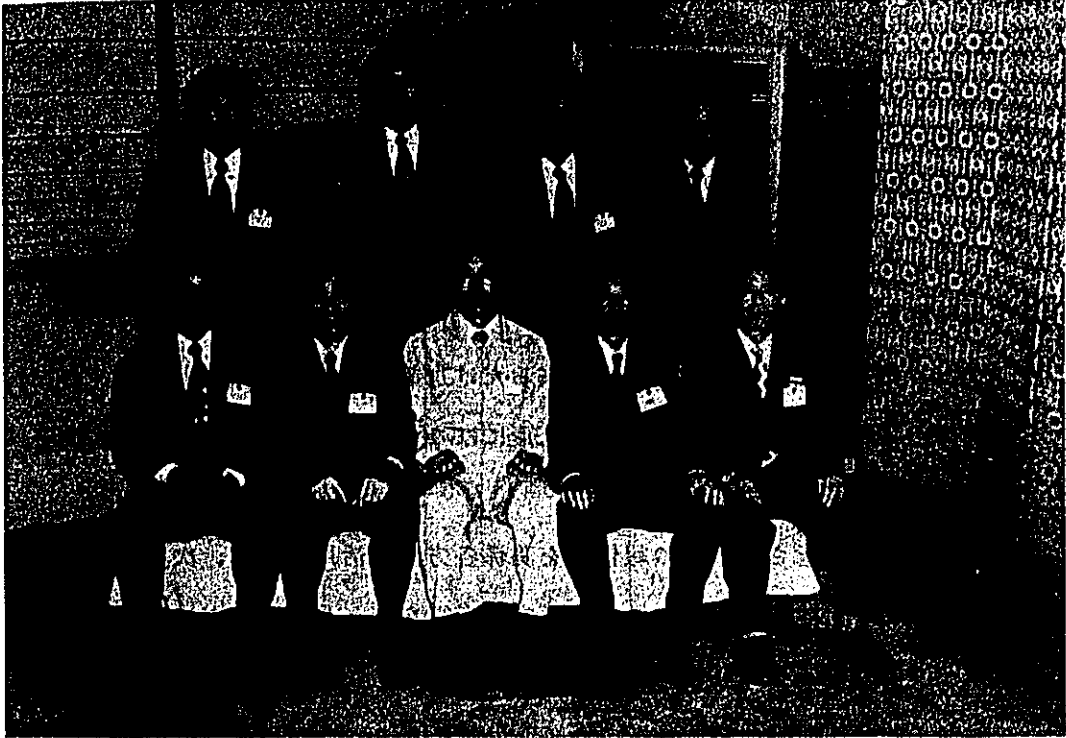
昭和49年12月10日

国際協力事業団

移住業務第二部長 中島 長市郎

も く じ

まえがき	国際協力事業団移住業務第二部長 中島 長市郎	
研修派遣教師団出発時の写真と名簿		1
編集にあたって	研修派遣教師団団長 藤田 良明	2
視察日程		3
視察報告		5
1. 南米大陸・ブラジルへの第一歩	岩本 馨	5
2. 石川島ブラジル造船所 N・G・K（ブラジル特殊陶業KK） サンパウロの日本人学校	相川 忠久	9
3. サンパウロ	首藤 愛治	12
4. ブラジルの茶業	山本 圭良	18
5. パラグァイ国・アルゼンチン国の 日本人移住者の活躍状況	高井 昭男	22
6. ベレン・マナウス	桜井 徳郎	27
7. アメリカ合衆国	中島 哲太郎	30
8. 視察ア・ラ・カルト	植木 暢久	31
9. 海外視察のまとめ	藤田 良明	36
参 考 資 料		
1. 海外研修派遣高校教師一覧表		40
2. 国際協力事業団国内機関一覧表		42



昭和49年度高校教師海外派遣団

昭和49年7月21日

後列左から 岩本, 桜井, 相川, 植木

前列左から 山本, 高井, 藤田, 首藤, 中島 羽田空港控室

昭和49年度高校教師海外派遣者名簿

県名	教師氏名	年齢	所属学校名	職名	担当学科	現住所
静岡	藤田 良明	53	県立磐田農業高等学校	校団 長	農業	静岡県磐田市中泉168番地 05383-2-261 愛知県豊橋市旭町旭362-3(自) 0532-52
愛媛	高井 昭男	44	県教育委員会高校教育課	指導主事	農業理科	愛媛県今治市高部甲 0898-43-0535 860
熊本	首藤 愛治	49	県立熊本農業高等学校	教 諭	英語	熊本県熊本市清水町 0963-44-2969 打越692
佐賀	中島哲太郎	48	県立塩田工業高等学校	教 諭	社会	佐賀県藤津郡塩田町 095446-7833 久間西817
広島	相川 忠久	46	私立広島工業大学附属工業高等学校	教 諭	社会	山口県岩国市錦見 0827-41-1914 2丁目2の49
京都	山本 圭良	43	府立木津高等学校	教 諭	農業	京都府相楽郡木津町 07747-2-1439 下川原23の6
茨城	桜井 徳郎	42	県立石岡第一高等学校	教 諭	農業理科	茨城県取手市大字桑原 02977-2-0998 1955番地
兵庫	植木 暢久	39	県立豊岡農業高等学校	教 諭	社会	兵庫県養父郡八鹿町 07966-2-2381 八鹿814
愛知	岩本 馨	37	県立安城農林高等学校	教 諭	農業畜産	愛知県刈谷市半城土 0566-22-0405 町荒井畑88の5
9県	9名					

編集にあたって

研修視察報告書の作成にあたっては、あらかじめ執筆者の分担を決めましたが、必ずしもそれにこだわることなく、各人の持味を充分生かし、広い視野の上にあたって、自由な意見を大いにもりこんだものにするような統一見解に立って編集計画を致しました。

また、執筆者の原稿を尊重し、出来るだけ加筆修正等はさけました。その結果多少一貫性を欠き、端折ったような形にはなりましたが、反面内容的に充実したものになったと思います。

以上の点に留意され、この報告書を関係各方面で活用下され、次代を担う若人たちに、「可能性の未来に挑む」旺盛な意欲を持たしていただけるならば、団員一同望外のよろこびであります。

終りに此度の海外研修派遣についてお世話になり、御指導下さった国際協力事業団（旧海外移住事業団）の関係者の方々並びにその他関係者に教師団一同厚く御礼を申し述べます。

昭和49年11月

研修派遣教師団団長

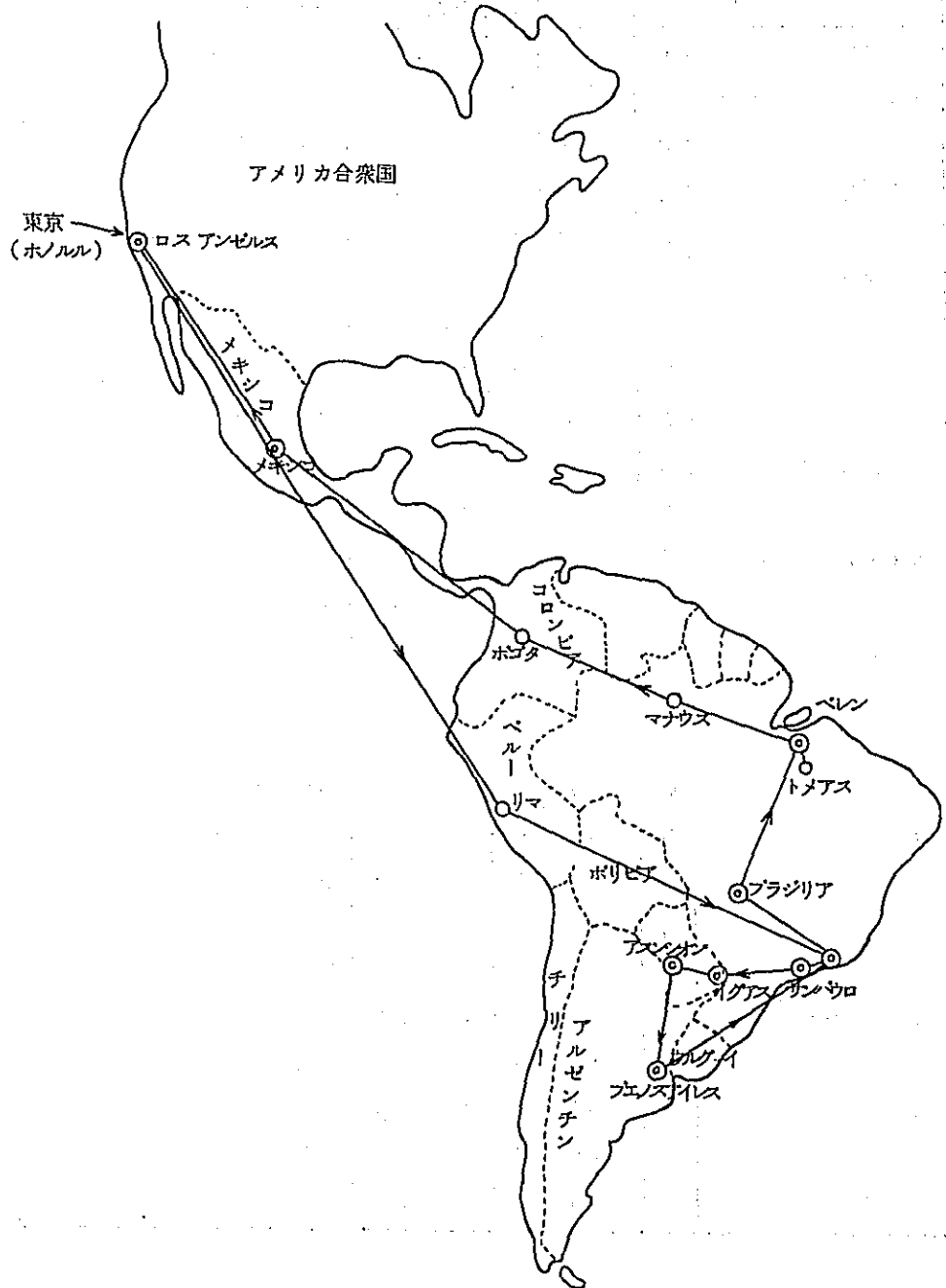
藤 田 良 明

視 察 日 程 表

(7月21日~8月13日)

都 市		日	曜	現地時間	便 名	ホ テ ル 名
東 京	発	7.21	日	19:00	RG831	
リオ・デ・ジャネイロ	着	7.22	月	9:15		パイサンドウ
	発	24	水	9:00	VP	
サンパウロ	着	"	"	10:10		ロンドニア
	発	30	火	9:45	RG140	
イグアスー	着	"	"	12:10		アカライ
	発	31	水	14:00	バス	
アスンシオン	着	"	"	19:00		内山田旅館
	発	8.1	木	13:40	BN973	
ベエノスアイレス	着	"	"	16:16		ノガロ
	発	4	日	11:30	AR222	
(リオ・デ・ジャネイロ)	着	"	"	15:20		
	発	"	"	21:00	VP280	
ブラジリア	着	"	"	22:30		プリストル
	発	5	月	21:20	QD450	
ベレン	着	"	"	23:45		バンジヤ
	発	7	水	8:00	SC106	
マナウス	着	"	"	9:00		
	発	"	"	15:15	RG872	
メキシコ	着	"	"	20:50		アンバサドル
	発	8	木	10:15	MX900	
ロスアンゼルス	着	"	"	12:20		ハンエンダ
	発	11	日	9:00	PA831	
ホノルル	着	"	"	11:25		ドリフトウッド
	発	12	月	16:35	JL001	
東 京	着	13	火	19:25		

視察コース略図



視 察 報 告

1. 南米大陸・ブラジルへの第一歩

愛知県立安城農林高等学校教諭 岩 本 馨

7月21日(日)、19時30分。一行9名は待望の南米への直行便、VARIG、831便、ボーイング707に搭乗。乗客158人、大平洋上が悪天候とのことで定刻より1時間遅れて20時25分に羽田を飛び立った。

21時には食事が配られ、初めて食べる南米式の機内食はボリューム満点、おなかもふくれたところで22時頃目をつむるもジェットエンジンの騒音が耳ざわりでほとんどまんじりとしないうちに午前1時頃空が明るくなる。3時半「オハヨウゴザイマス」とスチュアードがおしほりを配る。そのスチュアードの1人、日系の静岡出身で子供の頃ブラジルに渡ったという清水さん。我々一行には何かと気をつかい献身的なサービスぶりには感激した。午前4時に食事、サンフランシスコ上空を南下してロサンゼルス空港に給油のため一時着陸。日本時間では6時30分であるが、日付変更と時差修正、さらにロスのサマータイムにより現地時間では21日の14時30分である。ロスは快晴で外気温30℃であったが意外と暑さを感じない。空港ロビーには事業団ロス駐在員の安藤氏の歓迎を受け団員一同心強く感じた。ロス空港を17時20分に離陸した飛行高度は15,000mとのこと、機中で2度目の夜を迎えれが仮眠しているうちに夜中の0時、食事が出る。機内ではギターをひく人もいて何となく陽気なラテンアメリカの雰囲気だ。ロスから8時間飛行して南米ペルーのリマ空港に現地時間3時30分に到着した。空港の気温20℃。インカ帝国の遺跡とリマはこの代名詞であるが、空港ロビーにて豪華な金銀細工や毛皮などをちらっとかきまみりリマを4時30分に離陸。アンデス上空16,000mを飛行。残念ながら雪のアンデスは暗くて見えない。7時に朝食、機は8時45分に下降を始め、機上より始めて縦横に走る細長い赤土の道と緑に包まれた南米大陸を望む。ついに南米はブラジルのリオデジャネイロのガレオン空港に11時(現地時間)第1歩を印したのである。

7月21日(日) リオ・デ・ジャネイロにて

・7月22日(月) JAMICリオ支部訪問 石川島造船所見学

リオのガレオン空港に着いて一番心配したことは、税関の荷物検査であった。日本を立つ前に7月1日よりブラジルの税法が改正され、税関の目がきびしくなったので覚悟して行くようにと聞かされていたが、9名の一行がそろって視察調査団であることをPRする団長さんの特製による日の丸入りの名札を胸につけ、躊躇することなく荷物を広げたことと、VARIGの係員で日系女性の三浦さん

が通訳と格別の取り計らいをして下さったお蔭で難なく全員パスしてほっとした。

空港には事業団中南米代表部の平尾氏、リオ支部の竹中、中島両氏が出迎えて下り車で約25分(20Km)走ってパイサントホテルにまず荷物を預ける。

リオの町は約350年の歴史を有するといわれ近代的な高層建築と今にも崩壊しそうな古い建物が対比的に目につく。今新しい都市計画により、地下鉄工事が進められ古い建物もとりこわされ、工場建設が進み、更に近代化へと目覚ましい躍進をとげている様が如実にうかがえる。

14時30分、JAMICリオ支部を訪問。支部長の川路国三氏に温かく迎えられお話を聞く。その中でまず生水を飲むと腹いたを起すからアグアリンドイヤーといって売っている水を飲むこと、ここドコロヤスリがあるので貴重品は肌身はなさないこと、夜は物騒だからタクシーなどで出歩かないことなどブラジル旅行についてのご親切な注意をいただく。

さらに、「今、日本語ブームというものがある。これは、企業進出に伴ったブームとみないで言語活動を通して民族がせり合っていると解した方が正しい。どの国も母国の言語を通して文化的勢力圏を築いていこうとしている。日系企業が出てくると日本語が話せるだけでも貴重な存在で給料もよい。移住地社会において、経済的に成功すれば、まず移住は80%成功したものと政府機関も移住者自身もその社会も認めるが、一世二世以下親子の縦の関係、祖国の文化をどうもってくるかが問題、親父は100万長者になったがその息子はポルトガースの田舎の方言しか知らないし、社会へ巣立っても意見、見識をもっていないとすれば、親が死んであとどちらへ流れていくか分からないとも考えられる。それが三世(孫)の代になった時、果して日本国の発展につながっているか、受人国の有用な人材になっているかどうかということが大きな課題である」と移住地のリーダーとしての卒直な所懐を披れきされた。

夕方近く、石川島造船所(I SH I BRAS)を見学。従業員数3,000名余、邦人日系人は約400名で近年日本から技術移住者が増えているという。目下、ドックでは13万tのタンカーを造船中であつたが、40万t級まで造船可能であるとのこと。造船所内で働いている人々は、ブラジル人が多いが現場で監督し、図面をみて指揮をとっているのは、ほとんど日系の技師のようであつた。

工場次長の宇佐美氏の説明によれば、部長級は、教育を受けた日系二世が多い。しかし、二世の顔は日本人的であるが考え方はブラジル人的であり、日本流の考え方でいくとトラブルのもとになる。社員に対しては、養成訓練をするシステムをとっているが、ブラジル人は愛社精神がなく、ネームバリューにこだわらず割り切っているので定着率が悪いとのこと。また、最近、日本から現地の事情を余り調べずに進出する企業があるので注意を要すると警告された。

ホテルへの帰途、ちょうど帰りのラッシュ時にあたり、車の洪水で渋滞、ホテルに着いたのは19時半。さて、ホテルで食べる初めての夕食、注文するのにメニューをみても分からないし、ポルトガースはさっぱりなので途方にくれるところを竹中課長さんの助けでやっと夕食にありつく。言葉の通

じない不自由さをしみじみと痛感した。

南米での第1日は、忙しく過ぎた。飛行機での長途の旅の疲れをいやそうにもホテルにはシャワーしかなく、日本式の風呂がこいしくてならなかった。

7月23日(火)

リオ・コチア産業組合、フンシャル移住地視察、JAMIC中南米代表部、大使館訪問、市内見物

8時30分ホテル出発。12人乗りマイクロバスでコチア産業組合に9時着、市場は朝の6時に終わってしまい、内部の後片づけをしているところであった。事務所で当市場で取扱う果物や野菜の出荷量について説明を聞く。例えばメロン(MELAO)の場合、果物全体の売上高の中で21.6%。4年前までは、サンパウロだけの生産でアルゼンチン、イスパニア、ペルー等より輸入していたが、最近、パラ州、パイア州などにおいて日本人の手で1年中生産されるようになり、9~10月にイスパニアから僅かに輸入する程度になった。ブドウ(UVA)については、37.8%の売上げで、3~4年前まではヨーロッパやUSAから輸入していたが、パラナ州において日本人が二毛作に成功し、普通は11~4月に終るがビニールハウス栽培により年中生産されるようになったとのこと。夜、見学すればあらゆる種類の珍しい果物や野菜が集荷されるそうだが、見られなくて残念であった。

次にリオ市より北東120Kmの位置にある事業団直営のフンシャル(FUNCHAL)入植地に12時到着。

北海道札幌出身の大場 勇氏を訪ねる。入植して12年目。果樹園20ha経営。ゴヤバ(GOIBA)という日本にはない果物を8ha、これは成長が早いので植えて2~3年で結実。時期をずらして剪定すれば、端境期にも収穫ができるとのこと。大場氏は研究熱心な方で在来のもを独自に改良して剪定、袋掛け、消毒など進んだ技術を生かしておられる。実際にゴヤバを試食させて頂いたが、味は淡泊で我々には特に美味という感じはしないが、伯国人には、日常酸味の強い物を食べるのでよく好まれるという。他に柑橘(モルコッチ、ナタール)を栽培。労働者は、夫婦、長男、長女と季節労働者若干名で年収10万クルゼーロ(約450万円)とのこと。

大場農場が繁栄されることを念じて13時半辞去。

当入植地には43戸が定着。小学校や集会所もあり、近くゴヤバ加工場が竣工稼働の予定。さらに4年前に電化工事が完了し、テレビなどの文化的施設も完備されてきた点は恵まれている。もちろん、事業団(JAMIC)の物心両面に亘る温かい援助が続けられ、大きな支えとなっていることも事実である。

道中で見かけた農村地帯における現地人の住宅や生活の程度は、余りにも貧弱である。しかし、広大な土地が荒れ放題に放置してある処が目につく。土地の値上がりを待って遊ばせているのか、利用する能力、資本がないのか? 全く勿体ない状態である。所どころに放牧されている牛(Zebu と

いうインド牛)を見かけたが1haに1頭くらいとのこと。それでもやせている。草地改良ともう少し集約的な短期肥育はできないのか。

帰路、14時 イタボライの町で昼食 露店で食べたミカン(タンゼリーナ)の味は実にうまくて忘れられない。ニテロイとリオ市を結ぶ海上の有料橋(7Km)を走って15時半に帰着。中南米代表部を訪問後、日本総領事館表敬訪問。平野総領事に挨拶後、17時より市内見物。キリスト像のあるコロコバードの丘(海拔704m)に登る。はじめてリオのすばらしい景観に魅せられる。また、百万ドルの夜景を眺望できたことは幸運であった。

ロドリゴ湖畔を通り抜け、コバカバーナ海岸に出て車を止め、高層のホテルや高級マンションの灯りでこうこうと照らし出される夜の波打ちぎわに立つ。

この1日の行程はきつかったが、終始お供して下さったJAMICの中村氏の現地での辛酸をなめた体験からにじみ出る巧みな弁舌と懇切なご案内には頭が下がる思いであった。19時より事業団主催の歓迎の招宴があって、リオでの日程を終る。

ブラジルの農業高校との姉妹縁組み

7月25日、事業団サンパウロ支部の格別のご配慮により単独行動を許され、このほど本校とサンパウロ州立ピニアル農高と姉妹校の縁組みが成立し、その提携記念の式典に参列させていただいた。

昨年2月、本校の教諭であった立川氏がブラジルへ農業移住された際、この姉妹校の話が具体化し、1年余りの歳月を経て実現の運びとなったのであるが、この間、州農業教育部の溝口茂雄部長、事業団本部、名古屋支部、サンパウロ支部、全拓連の各位にはずいぶんお世話になり、ご指導とご支援をいただいてやっと実を結んだのである。今回たまたま視察団員に選ばれて、その姉妹校訪問の機会が与えられたことは、実に幸運でありまた責任の重大さをひしと感じた次第である。ピニアル農高はサンパウロ市より北西へ約200Km、人口3万人の農村都市にある。創立1935年で州立農高35校中では歴史の古い学校である。生徒教約400名、園芸、畜産、家政のコースがあり、男子は全寮制である。起伏のある丘陵地に校舎、農場施設が点在しその周囲は見渡す限りの農場が広がっている。実習地400haで、スケールの面では本校の比ではない。それだけ広い農場の管理は30数名の雇用農夫と生徒の実習で行なわれている。特に生徒のプロジェクト実習が徹底していて収入の70%は実習に必要な肥料、農薬、飼料などにあてるため学校内の組合に積立て残りの30%を均等に配分して食費や小遣金などにあてている。この方式は日本の農業高校ではまねのできないことではあろうが、自営農業をめざす生徒の意欲的な姿をみるとうらやましい限りである。

いま、ブラジルは大アマゾン地域の開発をめざし、延長5500Kmのアマゾン横断道路の完成も間近かで、これら農業高校の卒業生はその開発のために先遣役となって活躍されることが期待されている。

日本からの青年移住者も農業高校への無試験入学が許され、現にピニアル農高には今年2名の卒

業予定者がいて大いに期望されている。ブラジルほど日本に対し開かれた国はないし、日系人が堂々と胸をはって檣舞台で活躍している国は他に例をみないであろう。今後、大いなる躍進の可能性を秘めたブラジルと日本とが互いに手を携えて発展していくためには、相互に補填し合うという基本的な姿勢に立って、まず人的交流を図っていくことが必要であると思う。今、ここに姉妹校という小さな種がまかれたことは大きな足がかりとなり、これが一つの絆となって人的交流の輪が広がればその意義は図り知れないものとなる。

この種の親善活動促進のためには相当の予算を伴うことになるが、国や県の積極的な支援を望んでやまない。

石川島ブラジル造船所

N・G・K（ブラジル特殊陶業KK）

サンパウロの日本人学校

広島工業大学附属工業高等学校教諭 相川 忠久

株式会社石川島ブラジル造船所を見学して

はじめにおことわりしておきたいことは、私の工場見学報告はその技術、設備、施設についてはなくて、その中の人間に関する側面についてのものである。

1. 工場内を歩いてみて

他の例に見られるように、工場内に少なくとも半年、1年と入り込んで調査してみなければその真相を把握したとは言えないのであるが、私の一寸見た感じでは日本人もブラジル人もその他の外国人も、白人も黒人も黄色人も、みんな仲良く協力して作業に従事しているようだった。全従業員3,054人中日本人は209人（1973年10月の当造船所概要）のみであるが、この人たちは常にブラジル人たちの先頭になって働らき模範を示しておられ、ブラジル人たちからの質問に対しては一いち丁寧に優しく説明してあげ、質問者はこれを尊敬のまなざしをもって熱心に聴くと言ふ光景は印象的だった。私たちの見学が終業時に近かったので、工場内のあちこちで整理作業や掃除をやっていたが、ブラジル人の極く一部には申訳にホウキを動かしているような者もいたが、大部分は真面目にせっせと作業に励んでいる様子だった。

この調子では人間関係もうまく行っていてモラルも高いのではないかと思った。

2. 工場側から聞いた話

日本のように大部分の企業が日本人ばかりでその活動を行なっている場合でも、その中の人間問題は複雑で、何時も難問が横たわっているのが実情である。ましてや外国への進出企業の場合この問題は更に何倍、何十倍とその困難度を増してくるはずである。ブラジル進出企業の場合その中の人間組

織は主に日本人+ブラジル人と言う形になり、しかもブラジル人は日系2、3世、ポルトガル系、イタリア系、ドイツ系、インディオ系等々の多系統からなり、学校教育程度もまちまちである。言語・宗教・慣習などの社会・文化構造も異なっている。

このように多種多様な人間の集まりが、一つの経営目的遂行のためにどのように組織されるかは私の大関心事であった。この問題解決の成否は進出企業の浮沈にも関わることである。

進出企業の方でもこの問題を重視し、在来の日本の経営方式の良さを活かしつつ、しかもブラジル社会にも適合できるような新方式が考案され、実施されつつあるようである。

この点石川島でもその方策の一つとして、リオ・デ・ジャネイロから40キロ離れた新工場の人事では処遇も実力優先主義が採用され、ブラジル人(日系2・3世も含めて)も優秀な者は、どんどん役員、部長、課長に任用されているようである。

また派遣されてきた日本人とブラジル人(日系2・3世も含めて)との間がしっくり行くには、お互いが真のアミーゴにならねばならない。アミーゴになる条件の一つは郷に従えることである。郷に従えるのは言葉・宗教・慣習などを一刻も早く自分のものにする事である。それにはいきなりブラジル人の中に入り込んで生活することである。

石川島では日本から派遣されてくる社員を先ず単身赴任させ、来るとすぐブラジル人の家に下宿させる。それからしばらくしてアパートを探させた後家族を呼寄せることになる。寮や社宅は、これらがあるとどうしても日本人同志のみが話し合い、生活するようになるので一切建てないとの事であった。

N・G・K 見学

N・G・Kは自動車の部品を製造する中堅の進出企業である。目下、ブラジルの自動車産業の急伸で部品製造の方も受注に応じきれないような状態なので、現工場所在地より10キロ離れた所に新工場を建設中であった。

工場はサンパウロ市より40キロ離れたモジ・ダセ・クルーゼス市にある。同市は人口1.1万人、その中で約1割が日本人および日系人だそうである。そのためか工場でも多くの日本人、日系人らしい顔に出会った。

この工場でも日本人とブラジル人との間はいまわっているようで、そうしたトラブルはないとの話だった。初任給、平均賃金ともに一般の会社より高い方だそうである。処遇も実力主義で課長、係長のポストに昇進し、また昇給するシステムになっているそうである。日系2世は日本語、ポルトガル語の両方が話せるので仕事の上でも有利な立場にあり、特に日系2世の女子は手先も器用なので細かい仕事に向いており、また気もよくつくので検査係などの重要な部署につけられていた。

どの従業員も明るい表情だった。黙々とよく働いていた。日本人の上役がブラジル人従業員に懇切丁寧に指導してられる様子は石川島の場合と同じだった。

昼休みのベルが鳴ると従業員たちはさも嬉れしそうな顔をして手洗所や給食室へ走った。そして作業場で、中庭で、木蔭でと思ひおもいの場所で一人が、あるいは三々五々で昼食をとっていた。彼らの弁当箱をみて驚いた。高さ15センチ、直径15センチ位だったろうか、測ってみないのでわからないが、随分大きなアルミ製のものだった。一杯詰った中味までは確めなかったが、われわれの昼食に比較すればずと上等で、量がなくて、上質のもののようにであった。

昼食が終わったら日本の工場と同じようにスポーツやおしゃべりを楽しんでいた。

工場内の環境整備もよく行なわれていた。自転車置場には自転車が前車輪を上に向けて天井から吊してあった。場所をとらないようにするためだそうである。

以上二つの工場見学をして色々参考になった。人間問題対策にしても、工場内の雰囲気からよく行なわれているように思えた。人間問題は今後ますます複雑困難なものになるかも知れない。若しそうであっても、会社側のその対策に引続いて力が入られる限り、問題解決は可能となるのではなからうか。

サンパウロ日本人学院

この学校へは、この4月から私の親戚の者も派遣教師として勤務しており、また外地の特殊学校としても関心を持っていた。この学校は日本からサンパウロに派遣された官吏、会社員などの子弟の教育を担当する小・中学校である。数年前までは他の私立学校の校舎の一部を借りて授業をしていたそうであるが、今ではサンパウロ市の中心部から約20キロ離れた静かな住宅地域の小高い丘の上に、平屋建のモダンな校舎が幾棟も並んでいる。企業進出の急増に伴って増加する生徒数のために別の校舎を幾棟も増築中であつた。移住者の中にも子弟をこの学校に入学させたい希望者は多いのであるが、とてもその要望に応じきれないのが現状のようだ。学校は四面木立に囲まれ、小鳥が囀り、日照もよく環境は極めてよらしい。校舎は南北に吹抜けの設計になっている。生徒たちは毎日7~8台の専用バスで通学するのだそうで、校門付近にそのバスが置いてあつた。月謝も高いそうであるが先ずは思まれた方の学校と言えよう。

しかし、先生側にも、父兄側にも悩みがある。先生が生徒に教える場合、日本の教科書を使用するので、内容的に生徒に理解できないことがある。例えば、夏冬が逆であるとか、動植物の種類・大きさの違いとか、車の左側通行と右側通行の違いなどである。

また中学生となると、学年が進むにつれて先生、父兄ともに高校進学への不安が大きくなって来る。最近日本人学校の中学部もその内容が充実してきたので、日本の高校入試受験の正式な受験資格を認められたのであるが、特に父兄にとっては、果して日本の高校に入学できるだろうかと言うのが悩みの種であるようだ。これには中学生の間に、日本にいる時のような受験地獄の実感が萌いてこないこともあるようだ。

最後に生徒たちの作文集である「やしのみ」5号を叩いてみよう。彼らはその澄んだ目で鋭くブラ

ジルをとらえ、素直にブラジルの社会にとけ込んでいっているようである。以下彼らの作文の中から二、三拾ってみると、「ブラジルは交通、教育、文化の面で遅れている面もあるが、親切な人が多くて道をきいたら途中まで連れて行ってってくれるような住みやすい点もある。」これはブラジルをよく見ている。

また作文の中には旅行記が多いが、サンパウロから、イグアスウ、サントス、リオは近い方で、ブラジリアとかブエノス・アイレス、ロサンゼルスの方まで軽い気持で旅行している。旅行もスケールが大きい。

ブラジルに永く住んでいるらしい子は、夏休みを東京のおばあちゃんの家で過して帰り、「やっぱりブラジルはいいな。」と言っている。彼はもうブラジルに根を生やしていると言えよう。

ある子は、同じ日本人学校の友人3人と一緒に、ブラジル人の子供たちのチームに入って仲よく野球をしている。

お父さんの任期が終って帰国する際、「日本に帰った方が勉強のためにはよいと思うが、帰りにたくないと言う気持も強い。」、「全く帰りにたくない。」と、気持は色々であるが、ブラジルのよさを語っている者が多い。

以上一部の生徒の作文を紹介したが、生徒たちはこんなに抵抗なくブラジル社会に飛び込み、とけ込み、生活しているのである。彼らが子供の時代から自然に身につけた国際性が、やがて彼らが成長した暁には、国際親善の大きな、力強い橋渡しをするであろう。

サンパウロ

熊本県立熊本農業高等学校教諭 首藤愛治

サンパウロでの研修視察報告書は、3名で記録することになった。重複を避けるため、それぞれ分担を決めた。私は全般的な分野にわたって書くことになった。

サンパウロでの日程は、次の通り。

7月24日(水)

9時10分到着(リオ・デ・ジャネイロから)

午前中 日程打合せ (ホテル ロンドニアにて。)

14時:事業団、総領事訪問

19時:総領事招待(公邸)

7月25日(木)

9時ホテル発 ブラジル日本文化協会、サンパウロ日伯援護協会、日本語学校、コチア産業組合、

日系邦字新聞社（パウリスタ、サンパウロ各新聞社）訪問

18時30分より 移住問題懇談会

セアザ（市の配給センター）視察

7月26日（金）

アチパイア（平中農場）、カンピーナス（オランダ植民地）

7月27日（土） 県人会毎に個別行動

28日（日） （県出身者訪問等）

7月29日（月）

モジダスクールゼス（N・G・K—ブラジル特殊陶業株式会社）（日系農場）

アルジャー、イタベケ（日系農家）訪問

7月30日（火） イグアス—向け出発

サンパウロに着いて：

古都リオ・デ・ジャネイロで二泊した一行にとって、もうブラジルに入ってから一週間もたったような感じがする。「百聞一見にしかず」という諺が改めて尊いものと自分に言い聞かせる。——これ迄何回となく映画や画報を見たり、一時帰国者の話を聞いたり、自分なりに調査した資料を頭の中につめ込んだ積りだったが、実際に見るもの、聞くもの、食べるもの、すべてが現実の姿として目前に展開しているブラジル——。これからいよいよサンパウロ入り。今回派遣された一行は、大きな同一の目的と目標を持ちながら、また個々にはそれぞれの任務と責任を持って来たはずである。

教え子に会える喜びと期待。姉妹校結成の任務。各校在伯同窓会、県人会の人々との再会や、その活動状況の視察等々。サンパウロこそがその地なのである。全日程中その4分の1の6日間を過ごすことから、その重要性を感じる。

7月24日（水）

ブラジル国内線クルセイロは1時間程度遅れたであろうか。一たん出迎えの人々と別れホテルに向う。その間、車窓から見える赤土の土堤とそのあいだに走る4車線の舗装道路の先に、高層ビルが次第に近づいてくる。珍しいものは何んでもカメラに収めて、帰ってからの報告参考資料にしようとする懸命な一行にとって、車は容赦なくスピードを上げて走る。南国の花が冬だというのに、色とりどりに咲きほこっている。気候は日本の5月頃の陽気。

ホテル到着11時。日程等打合せ中にも、もう空港からの各県人会長その仲出迎えの方々が付添ってくれる。ホテルの狭いロビーは超満員。14時迄休憩。その間各県人会の方などと昼食に出かける。

私は県人会長の案内を受け、ホテルから近い県人会事務所に挨拶を済ませ、ガルボン・ブエノ街の日本人食堂で昼食をご馳走になる。

「何がいいですか？」の質問に、メニューを見ながら「刺身」を注文してもらう。ぶ厚く切った公

害のない本物のマグロである。なるほど「サンパウロでは、日本にあるものでないものはない」と百も承知だったはずだが、別に出されたエビフライには「これは冷凍ものではなからうか」と一寸首をかしげながらを運ぶと、今の日本ではとても食べられそうにもない正真正銘の生エビ（大西洋岸）を使ったものであることに気がつき、その認識不足に第一ラウンドでノック・ダウン。そとあたりを見廻すと、この食堂のどのテーブルでも日本人が、日本語を使って、日本食をしている。当然のことかも知れないが、外国とは言え、さすが日本人で占めているサンパウロの街であることに恐れ入る。

14時全員集合。ホテルすぐ前の事業団サンパウロ支部に挨拶。続いて領事館に挨拶。伊藤総領事が応接室に現われる。団長が一行を代表して今回の研修視察派遣の目的を報告。団員一同緊張した面持ちで自己紹介。

伊藤総領事の言葉要約：「移住するとか、しないかは、全く本人の自由意志による。海外に出たいものは大いに来てほしい。ここブラジル日系社会に、たく山の若い血を入れたい。日本人移住地では朝から夜まで本当によく働くが、100人に1人ぐらいは色々と苦情を言う。日本から来た2、3日間程度滞在の新聞記者が、ともすると勝手な解釈で記事にすることが少ないが、その辺のところを充分気をつけて、正しい理解と判断のもとに研修され、夢と希望をもった若者に南米に来ていただきたい。」

領事館を出たころは夕方だった。ほど近いホテルまでの徒歩で、「日本では、日本人がなんて多いのだろう」と言った言葉と裏腹に「人種のるつぼ」と言われるだけあって、「サンパウロでは区別のつかない人種がなんて多いのだろう」と痛感する。判り切ったようなことでも身を持って体験する尊さを感じながら……。ラッシュに行きかうパウリストの足どりは軽く、そして小ぜわしく感じられるのは、なるほど、ブラジル国の経済成長率が近年11%に上昇している息吹きが、ここサンパウロが代表しているのだと受け止められる。

19時：総領事公邸招へい

伊藤総領事、細谷領事、島田氏（元領事）

白石事業団支部長、津浦課長、教師団一行等、晩餐会に列席。

教師団の自己紹介を兼ねて、それぞれ今回の派遣についての抱負を一言ずつ述べる。

元領事をされ、退官後ブラジルの魅力にとりつかれ再渡伯したという島田氏の談話要約：「戦後ヨーロッパでは、日本人は小さくなっていったが、ここ南米に来たら日本人は堂々と胸を張っているのに気がついた。将来の農業地としては南米が一番利用できる。まだまだ発展するだろうし、発展させねばならない。ブラジルでは農業保護制度はとっていないが、やる気でやれば充分できる。ただし金の成る木はない。ブラジルでは成功の可能性があるが、それに伴う苦勞も多い。その覚悟があり、根生のあるすぐれた青年を送り出してほしい。その青年の努力には必ず報われる成功の度合は大きい。しかし時代も変わりつつあり、ある程度の資金が必要だと思ふ。」（この言葉は、その後今度の研修で

何人かの人からも聞かされた。ただし、その資金を最初から当てにするのではなく、近い将来に、もうこれでよし、という時の準備資金につき込むために必要だ、と言うことを)

細谷領事の談話要約：「健康第一、そして忍耐力。5カ年間の辛抱(言語や風俗、習慣になれるための)が必要だ。昨今大豆で当てた人でも明日はどうなるか判らない。経営感覚(国際的な)を充分身につけていただきたい。」

皇太子御夫妻が南米御視察の際、憩われたという公邸のホールでの晩餐会であるが、終始和やかにうちつけて、すし・おでんの和食に、珍しい南国の果物を賞味しながらその日を終る。

7月25日(木) 夜 移住問題懇談会

サドキン電球工場社長 山本勝造氏

サンパウロ大学教授 経済学博士 斉藤広志氏 白石支部長他事業団職員 教師団一行が出席

山本氏の談話：23才の時農業移住として渡伯。その時すでに妻帯。もともと商人の息子だった氏は、農業をやめて商売をやれると思った。野菜の小売、問屋、貿易と店を拡大し、今日の企業に到達した、とのこと。1958年の日本人移民50年祭の実態調査によると一家族7回の転業をしているそうで、離農した人65%、農業を営む人35%という。「原因が結果を生み、結果が原因を生む」ブラジルではその回転のリズムに乗ることが大切。と言われたが、もちろん氏の今日あるのは、努力と研究と克己勤勉がもたらした賜と、つけ加えるべきだと思う。また氏は現在日系大臣・植木勲力・山大臣の育ての親でもあると言う。

斉藤先生の談話：新しい農業形態 集約農業の必要性。新しい栽培作物。例えば、ごぼう・うど等。そして今後農業移住をする人でも、企業的手腕の持ち主であればよいと思う。しかし大学卒業してからよりも、高校卒業程度の方が、それだけの年月で、大学卒業以上の実力がこの地で速く身につくこと。また山本氏は、農産加工といった方面の技術進出も将来可能性があって面白いのではないかと、とのこと。そういえば、今度の南米視察中どんな田舎に行ってもコカ・コーラのない処はなかった。コカ・コーラは南米全土を征服していると言っても過言ではない。若し、これに代る清涼飲料水(地元でガラナ飲料水はあるが)が、日本人の手によって生れ、それが当たるとなれば、全世界が変わるだろう。とやや誇大妄想になりかかるのも、ここに来てからは許されるかもしれない。

最後に市の配給センター、セアザを視察。日本人農業者の開拓精神の結晶であることは余りにも有名。有意義な一日を過ごす。

7月26日(金) アチバイア(平中農場)にて

サンパウロより60K地点。途中参考としてポルトガル人(主人は街で弁護士)経営のコーヒー園を見る。コーヒー園としては小規模とのこと。ただし、最近は一たん奥地に追われたコーヒー園が、土壌改良などの発達に伴い、再び近郊に戻りつつあるとのこと。

平中さんは独立して6年目。まだ20代と思われる人。現在主としてカーネーション(4.500m²)

をやり、13万本を植え付けている。その他バラ(スーパースター、ソーニャ)も作り、全面積をフルに使えば7,000㎡。カーネーション苗はオランダから取り寄せるそうだが、花の色は余り問題でなく、大きくて、形が見事なら売れるとのこと。3年目に事業団より資金60%を借用し、冷蔵庫を造っている。後輩の青年二人を呼び寄せ、現地人10人程度使用している。彼等には2世帯、2棟の家を造って居住させている。立派な若年経営者である。年間租収入1,200万円、利益は480万円程度でまだ悪い。将来は親ゆずりの植林を本業としたいとか。「これから望む日本の移住青年について」の質問に答えて、「ただガムシラにやっけて行く者がよい。自分も初めは山口さん(雇主)のところでは怠け者だった。意志が問題で、2年前渡伯した後輩に責任を分担してやらせているが、どうにかやっている。昨年は相当額の失敗をやったが、今はその分までがんばっている。ブラジル人農園も、最近ではどんどん日本人農園経営に追いついて来ているので、やる気が一番だ」とのこと。

7月27日(土) 県人会事務局長と同伴で。

昭和46年10月、全国高校海外指導教師研究協議会の際、横浜から神戸まで、移住船アルゼンチナ丸に同乗した二人の青年にインタビューをしたことがあった。二人は園芸高校の卒業生で、雇主ブラジル・サンパウロの石橋さんのところに行くとのことであった。石橋さんは本県出身で、コロンビア花卉の権威者として有名な方である。私はいかにも現代っ子風のこの二青年が、果してまだ石橋さんの処で働いているかどうかという、興味ある追跡調査の機会にめぐまれた。期せずして、事務局長吉永さんが案内する予定地として、石橋さん宅を選んでいたので偶然だった。土曜日の休日をさいて吉永御夫妻と三男の息子さん夫妻に伴なわれて、例のホルクス・ワーゲンでスザノ市に向った。

ところが残念なことに、先方ではそれと知らず、本人達は家族と一緒に週末旅行で留守だった。しかし、石橋さんの話によると、二人ともなかなか真面目で、自己の目標に向かって着々と努力していることを聞き、ほっとした。ともすると現代っ子は……、そして今の教育は……と非難されがちな教師にとって、直接の教え子ではないが、ここブラジルの地で立派に成長している青年がいるのだと、安堵する。二人共夜学に通い、ポルトガル語を勉強中とか、そして一人は続けて園芸を、一人は畜産の方に進みたいとか。二人が別々に仕立てたという20年生実生の日本黒松を見ると、一人はたくみに、一人はどことなくぎどちなく、その後者の青年が畜産に進む希望をかなえてやるのが私の努めですよ、と石橋さんは言う。戦前派の一世のおじいさんとしては、よく日本の現代っ子気質を捕えていることに感心する。

これから移住する青年の3つの条件は、第一健康・第二言語・第三自動車運転。そして何をやるかハッキリした目標が必要だという。園芸場を回りながら、今やっている仕事につき一つ一つ説明してくれる。見渡す限りの久留米つつじ(本場83万本、分場合せて300万本)が満開で印象的だ。野放しの熱帯観葉植物の間に、日本の庭園用の樹木でないものはないのが却って無気味さを感じる程である。育苗舎のいぶきの木苗が一年以上も枯れないのに、カルクがつかず、発根しないのが目下研

究課題とか、努力そして研究、そして努力ということの大切さを学び取る。

若い頃、ブラジル語が分らなかった昔、石けんを求めるとにチーズを買って来て、この石けんはいっことに泡が立たんではないかと外人店主にどなり込みをしたという……よもやま話にも花が咲き、一時を忘れて帰路につく。サンパウロ市内に入ろうとする途中、一方通行の反対路に、石油のダンプカーが横転していて、二車線上の車が20Kにもわたって渋滞しているのを左側に見ながら、夕方近くホテルに着く。

7月29日(月) 長尾養鶏場訪問

丘陵の一村といった感じの中に鶏舎が四方八方に建っている。従業員200名。分場を合せ月産150万羽。もうこうなると養鶏生産工場である。「たまごが先か、にわとりが先か」の議論の余地なしである。専門分野でない私が詳細に書けないのは残念であるが、伝染病等を避けるため、各鶏舎毎に管理人を別れていることや、1日20トンの飼料工場。病気に対する抵抗、交配品種の絶え間ない研究。それに羽鑑別で、特技の鑑別人は、週4日の労働で1カ月2500ドルの高収入を得るとか。長尾氏は農業移民として移住し、過去数回の転業を重ね、途中失敗もあり、15年くらい前から現在の養鶏を通じてブラジル社会に貢献しているのである。

・ 加納農場訪問

果樹が主体で、現地人15・6人の労働者を使用。時間がなく、早々に発ち去ったが、ゴイヤバの箱づめ出荷中で、一面の畑にはモルコッチ(ミカン)ピワ等の果樹が植えてある。

サンパウロを発って:

人口やがて8,000万を数え、ブラジルを代表する第一の都会サンパウロ。滞在6日間で、これから全体のブラジルを語ることは、はなはだ早計であり、冒險なことかも知れない。しかし「一斑を見て全豹を知る」という諺もある通り、肌で感じたブラジル——。「明日の大国ブラジル」「21世紀の国ブラジル」と誰もが言う。しかし、それが単なる広告の見出しであってはならない。

多くの日本人が、ブラジルはまだ地球の裏側にあると思っているのではなからうか。地理的には確かにそうである。借された望遠鏡をわざわざ逆さにして、それから遠く、小さく覗いているような気がしてならない。それに対して、ブラジルの日系人、ことに一世の人達は、各自の望遠鏡で正確な焦点を合せて、絶えず母国を凝視していることを忘れてはならない。日本の現況がどうであるかは、私達以上にその人達は知っている。

私はブラジルは速くにあるのではなく、感覚的に隣国と考えたい。そう考えるべきだと思う。そして、これからブラジルに勇飛しようとする青年にはこう教えたい。「0(ゼロ)からの出発。そして数々の障壁にぶつかって、たとえ-(マイナス)になっても、それはすべて、やがて+(プラス)への援助になる自信と希望を抱いて進むこと」を強調したい。より正しい認識をもって、ブラジルのため、日本のため、そして自己のために……、いや、もっと大きな世界人類愛のために献身しようとする若者に。

ブラジルの茶業

京都府立木津高等学校教諭 山本圭良

ブラジル茶業の現状

ブラジルへの茶の導入は、茶種子、茶職人を中国より誘致した、ブラジル帝政時代に始まったと伝えられており、サンパウロ市の中心街に日本人がお茶の水橋と呼ぶViaduto de cha'がある、この付近におそらく茶園があったのではないかとされている。

現在のブラジル茶の主産地は、サンパウロ市より南西に約190Kmのレジストロを中心としたその近郊タピライ、ジュキヤあたりにある。標高30m~50m、山間部で150m前後、平均気温(年間)も22.8℃、年平均最高気温、最低気温もそれぞれ28.0℃、17.7℃、年間降水量1580mmと、茶樹栽培の環境としては適地といえる。日本の栽培地との比較では、少し気温が高いといえる。

ブラジルの茶を産業として盛んにさせたのはレジストロの岡本寅蔵氏で、在来の中国種を栽培したが、紅茶としての品質が良くなく、1934年、セイロンより紅茶用種子を持ち帰り栽培を始めた。ブラジル茶業が盛んになったのはそれ以後といわれている。

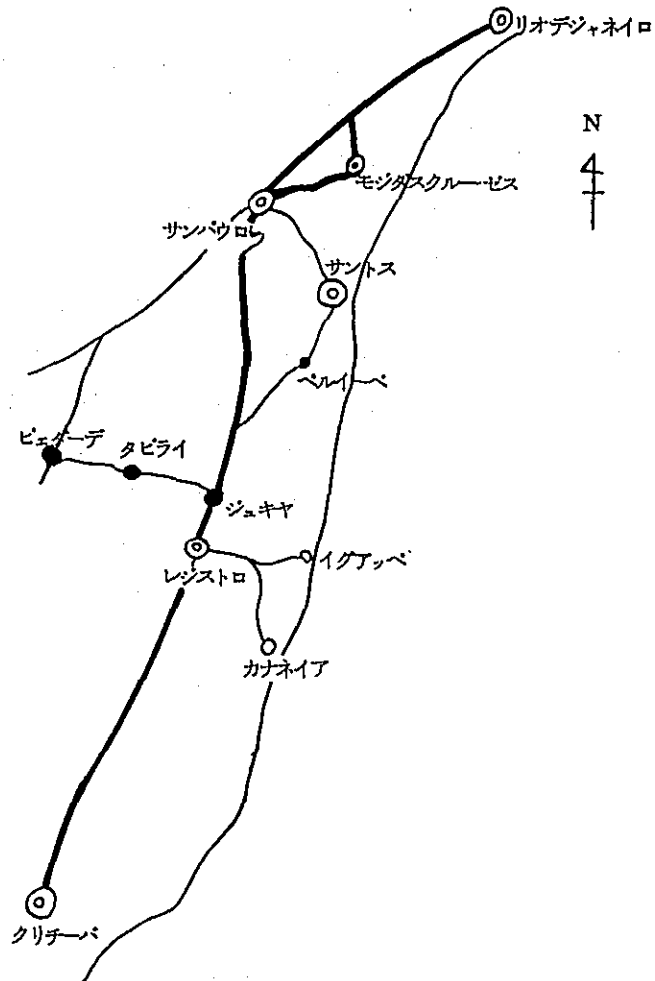
サンパウロ市から北西約50Kmモジダスクルーゼスにも茶業が行なわれているが、レジストロの生産には及ばない。

レジストロを中心とする茶樹栽培面積は正確な統計資料がなく推定約4200haといわれ、その他にバナナ、パイナップル、ミカン類、井草(ゴザまで加工)がある。

栽培されている品種についても固定されたものもないようで、アッサム系のもので、外観上ではアッサム系のマニブリ型、キャン型等雑多であった。10年位前にサンパウロ州立農業試験場で選抜育成された「IAC-259」という系統が奨励され現在の造成茶園は全てこれによっているようです。この系統は生産量、製茶品質共にすぐれており、この系統の品種茶園も300ha以上を推定されている。

茶の生産時期は日本と異なり8月に始って翌年の5月に終る約10ヵ月で、最盛期は11月から3月という事である。摘採方法は全て手摘みで、8~10日周期のまわり摘み、1心2葉摘みを行ない茶期中に28~30回位摘み、1人平均1日の摘採量は40Kgである。

生葉の生産量は1ha 6250Kg、平均で良好な茶園では10,000Kg以上生産される。前述のIAC-259では成園で14,500Kg ~ 20,000Kgを生産するということで、この品種は優秀だということです。



茶園管理は、5月の茶摘みが終わると直ちに剪抜作業に入り、基肥の施用を行なう。肥料は混合肥料を使用、1ha当り1500～2000kgを施し、中耕と除草を行なっている。剪枝は茶園の樹令、状態により、浅刈、中刈、深刈と区別して行ない、日本より導入した自動剪定機を使用している。肥料は、N・P・Kを8、7、4の混合割合で製造したものを使用している。追肥は11月及び2月頃硫酸のみを1株当り約30gから50g宛施用している。除草は茶園が成園になると殆んど必要がなく、それまでは年3～4回鋤を使って行なっている。

茶園は株間70～75cm、茶間120～150cmで等高線植えてあった。仕立は水平仕立である。生産農家は専業経営で240ha以上で工場も経営しているが、小規模農家は1.2haの茶園で、他の作物との組合せ経営を行なっている。

荒茶製造工場は、現在コチャ産業組合関係のものが中央工場を含めて5工場あり、他に会社組織の

ものが3会社あり工場が6工場ある。これは全て紅茶製造である。

工場規模は大きいもので荒茶生産年間1,500トンから1,000トン、小さいもので500トンである。製造は何れも大型機械によるもので、最近までオーソドックス法によっていたが、中央工場を含めた3工場は、ロートルベレを使用する特殊製造になっている。これは、ヨーロッパ、北米市場の要求によるもので、この方式は東アフリカ、セイロン、インド、でも実施されている。

各工場で荒茶製造から精選を連続で行ない、その後包装して販売している。

製品の85%は輸出で残り15%が国内向けで、これらは折詰め、又は小箱詰めにして出している。

製造に要する諸経費について調査した結果は、摘採費1kg当平均Cr\$0.20であり1日40kg摘採するとしてCr\$8.00となる。剪採賃は1人1日に平均350株位作業するとして、Cr\$10.5製造費。生葉1kgにつき約Cr\$0.10。工場搬入費1kg当りCr\$0.03となっており集荷製造費1kg当りCr\$0.13となっている。(US\$1.00=6.8Cr\$, Cr\$1.00=¥43.00)

ブラジルにも労働法、特に農村労働法があって、最低労働賃金制が実施されており現在Cr\$350.-(1カ月)と定められている。但し青年に達しない者はこの $\frac{1}{2}$ である。

次に近郊地タピライに於ける茶業であるが「山本山」「丸紅飯田」「コチャ産業組合」の三者によってGREEN TEA Ltdを設立、タピライ工場を借り、日本より緑茶製造機械4セットを導入して、緑茶の製造を実施している。

茶園は大体400haが成園ですが、当初紅茶を目標としていたため、アッサム系のもので全て挿木によって造園されていた。「山本山」では日本の緑茶用品種「やぶきた」の導入を行ない、造園中であるといわれている。今のところその生産量も少なく、製品は全て、山本山の一手引受け販売であるということです。

山本山の緑茶工場が見学許可されず内部がみられなかったのは残念であった。

前コチャ産業組合中央会、レジストロ製茶協同出荷組合長の山崎氏が最近自分で緑茶製造工場を経営されるべく計画中であるとの事であった。

モジダスクルーゼスにも茶が栽培されていたが、現在茶業を行なっている人は栗田氏1人で、京都府綾部市出身の波江有蔵氏に逢いお話を聞きましたが、氏もかつては紅茶の製造をされたが、最近では人件費が高く、工場労働者になるものが多く、採算が合わず、モジダスクルーゼスの茶業は絶望的であるといわれた。大きくやっておられた、乾氏も御主人の入院を機にウサギの飼育に転換されつつあると聞いた。

やはりブラジルの茶業は、レジストロが中心になるものと考えられる。

今後の動向

将来の見とおしであるが、現在紅茶は世界的に生産が消費を上回っているが、インド、セイロンがFAOによる会議の規制を自主的に実施しており、ロンドン、アメリカ等の市場は安定しているよう

である。その上インドなどの消費量の増加ということも、ブラジルにとっては好条件といえる。

南米においても、アルゼンチンをはじめマテ茶の消費に代って紅茶の消費が伸びている。その上最近の若者の間にコーヒーよりも紅茶を好む傾向もみられ、かつての上流社会の飲物という考えはなくなってきた。

市場確保の必須条件は、嗜好の動きをすばやくつかむことであり、それに応じた製品をつくり出す事が必要である。そのため常に茶樹品種、製造方法等の研究は必要であろう。

近年ブラジル国も工業化が進み、農業労働者の都市流出があらわれ、農業地域に於ける労働者の確保が年を追ってむつかしくなることも予想される。いづれ茶園管理作業も機械化を考えねばならない時代が来たと思う。レジストロの地形は、傾斜地なる為管理機の大型機は導入が困難ではなからうか、機械の導入を考えるならば、茶園の栽植も考慮せなくてはならないので、将来計画をたてての茶園維持をしなくてはならない。

レジストロの茶業は、現在安定しているので問題はないが、近い将来前述の問題の解決が必要になってくると考える。

ブラジル緑茶は、現在山本山一社であるが、近々、山崎氏が製造を始るとの事である。

この事については、現地でも賛否両論があるようである。日本国内に於ける茶の動向が大きく、影響する。即ち日本でも生産費特に労働賃金の上昇ははげしく、中級茶下級茶が台湾、中国、ケニヤ、インド等から輸入されているが、これらの国の製品との競合に勝つ事が出来るかという事が大きな問題になってくる。特に中国大陸の緑茶が輸入されるようになると、品質的には南米産よりは上位になる事は予想される。したがって、ブラジル緑茶がその販路を日本だけに求めて、生産されるのであるならば、将来に不安が残る。ブラジル緑茶は、日本茶商社との完全提携か、日本緑茶の海外市場での競合に於けて、北米に進出するか、南米日系人社会を背景に国内外に販路を開拓する事が前提になってくると思う。いづれにしても緑茶用品種茶園を設ける事が必要でレジストロに適した緑茶用品種を育成する事が先決である。

むすび

以上、私が2日をかけてレジストロを中心にブラジル茶業を視察した事柄を述べたが、限られた日程で、茶農家も数人にしか面談できず、そのみかたも独断的であると思うが、かねがね関心のあった事柄でもあるのでその概要のみを報告した。更に現地の茶関係の人々とも交信し、南米における茶業を今少し勉強してみたいと思う。

パラグアイ国・アルゼンチン国の日本人移住者の活躍状況

愛媛県教育委員会高等学校教育課指導主事 高井 昭 男

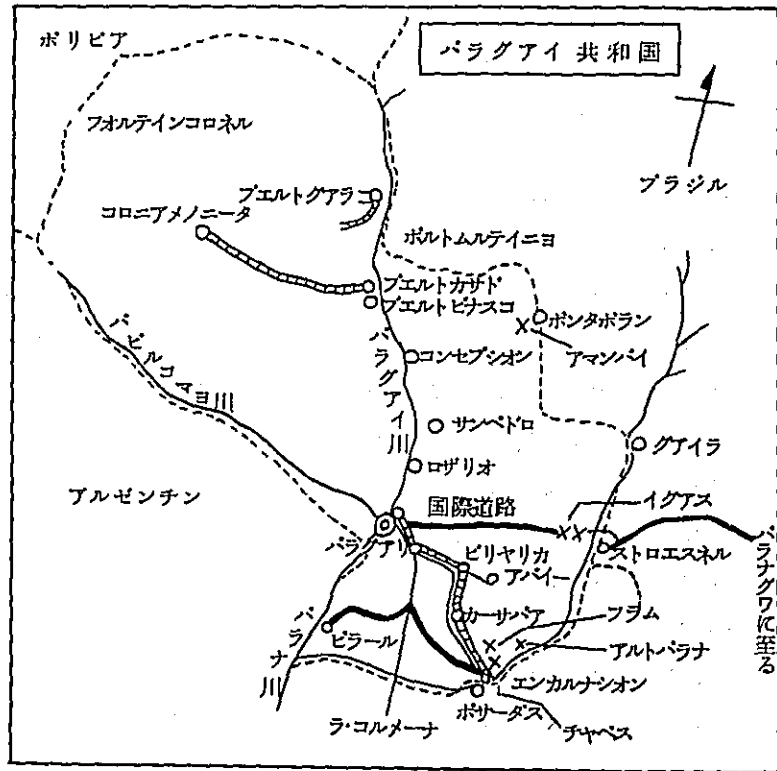
1. パラグアイ国の日本人移住者の活躍状況

(1) 日本人の移住状況

パラグアイ国への日本人の移住は、昭和13年、ラ・コルメナ移住地へ入植したのが始まりで戦前に123戸が入植した。しかし、第二次世界大戦によって中絶されたが、昭和29年、チャベス国営植民地に入植し移住が再開された。その後、日本政府は、昭和30年にフラム移住地(16000ha)昭和34年にアルト・バラナ移住地(83,500ha)、昭和36年には、イグアス移住地(87,700ha)を設け、約750戸、3,600人が移住している。

また、昭和36年7月には、日本政府とパラグアイ政府の間に移住協定が結ばれ、今後30年間に85,000人の日本人移住者の入国が認められている。

現在までに主な移住地に入植している戸数及び入植歴は、イグアス156戸(11年)、アルトバラナ323戸(15年)、フラム219戸(17年)チャベス65戸(19年)アマンバイ161戸(17年)である。



(2) 開発に取り組む国際協力事業団

昭和36年7月、政府間における移住協定に基づき、国際協力事業団では、パラグアイ政府から土地の提供を受け、移住者を送り込むとともに、移住地の中心であるイグアスに総合農業試験場の建設計画をたて、養蚕、林業及び畜産センターを柱とする一大試験場の建設に着手しているが、これが完

成すれば、パラグアイ国唯一の施設、設備の完備した試験場となる予定である。

総合農業試験場では、この施設の完成をまって農業開発のための総合的な試験研究を行うとともに移住者の研修を計画しているが、この研修は日本人移住者だけでなく、パラグアイ国農業者の研修も同時に行うなど、両国一体となってこの開発にかける並々ならぬ意欲の程がうかがえる。

さらに、同事業団では、移住者の農業開発を援助するため、イグアス移住地に小学校の建設及びスクールバスの購入、診療所の開設等、教育や保健衛生面に力を入れる一方、農業生産については、土地の分譲、営農資金等の貸付け、さらには、農家の経営診断をするなど、あらゆる面から指導、援助を行い移住者と一体となって開発に取り組んでいる。

(3) 農業開発の現状と見通し

国内における主要産業である農業は、農業振興計画にそって徐々に進められているが、農耕可能面積は、国土の約20%といわれながら、実際に利用されているのは、約90万ha 全国土の2%強、すなわち、農耕可能面積の10%しか利用されていない状況である。この原因は①パラグアイ人はのんきであり、その日その日の生活以外に大きい意欲を示さない。②亜熱帯性の作物がよいのか、暖帯性の作物がよいのか、作目の選定がむづかしい。③一般的な食用作物を作っても価格が不安定でありまた輸出もできにくい。等から自給自足的生産に終始し、経営規模の拡大を図らなかったものと考えられる。

国際協力事業団では、試験研究の結果、適作目として牧畜、林業構想を打ち立て、その振興を図ろうとしている。しかし、移住者は入植後日が浅いため、多額の資金が必要であり、また資金回収の遅い牧畜、林業に手を出すことができない状態である。

この構想を実現させる一段階として、現在移住地では、国内外むけの野菜(トマト、ピーマン、セロリー、キャベツ)果樹(柑橘類、モモ、ピワ)穀類(大豆、小麦)及び、ジャガイモ、養蚕、養鶏さらに、セルバズルセ(ステビア)等の栽培、飼育によって資金を蓄積し、将来の飛躍のためのステップにしようとしている。しかし、野菜類は、国内市場の需用量に限度があり、価格も不安定であること、果実は生産しても現地人の嗜好にあいにくく、売れ行きが不振であること、養鶏は輸入飼料に依存しているため卵価が不安定であること、穀類は世界的な供給不足によって、2~3年来好景気に恵まれたが、規模拡大、機械力の導入のために資金を投入し、その回収にこじばらくかかること、など移住者は幾多の問題をかかえている。

しかし、協力事業団の指導や、移住者の研究努力によって近い将来野菜、果樹の適種類、品種の選定が行われるであろうし、穀類の栽培や養蚕の飼育も軌道に乗ってくるものと考えられるので、これらの成功をまって、永年作物である林業や長期にわたる牧畜業が、日本移住者の手によって大々的に行われるものと思われる。

イグアス移住地の石田氏は、堅実に農業経営に取り組んでいる1人である。石田氏によると、過去

にドミニカ移住者として努力していたが、動乱のほっろによりやむなく東京に帰り、海外移住の機会を待っていたところ、10年前にイグアス移住を知り、入植することができた。現在、30haの耕地をもつ中堅移住者で、経営内容は、野菜ではトマト、果樹では柑橘類の栽培と、養蚕1回はきさて量50箱、にわとり6,000羽を飼育する多角経営を行っている。

同氏の説明によると、収入源は主としてトマト、養蚕である。養蚕は桑畑12haをもち、現在5ha新植中である。年間の気温が高いため、7回の掃き立てが、可能であり将来性は十分ある。果樹類についてはネーブル、オレンジ、ボンカン、キンカン等いずれも生育早く、無肥料、無農薬で栽培可能であるが、オレンジ類は、市場性がなく自家用として作っているにすぎない。大豆も栽培可能であるが、収穫期に雨が多く、大規模栽培は無理である。このように現在適作目の種類、品種を選定中であるが、それでも年間所得は約2000万円あるので、資金をできるだけ早く蓄積し、牧畜か林業かいずれかに本格的に取り組みたい。パラグアイは未開発国であるだけに、日本に比して投機性もあり、また資金の蓄積が容易であるので、将来に対して希望もてる、と話をむすんだ。

一方、吉崎氏の経営するイグアス農牧会社は、4年前に1,200haの農地を買収し、放牧を始め、現在、軌道に乗りつつある。

経営方向として、年間放牧を目指しているが、冬期に牧草が枯死し、飼料に不足を来たすので、いま150種の牧草を試作し、冬期にも枯れない品種を育成中である。これが実現すれば1ha1頭の放牧から1ha5~6頭の放牧が可能となり、生産性が著しく高められるので、その成果が各方面から注目されている。

このように、日本人移住者は野菜、果樹、穀類、パレイシ、養蚕、牧畜等の各方面にわたって、真げんに研究と取り組み、経営の近代化への途を歩んでいる。

(4) 海外進出への心構え

パラグアイ国の農業開発は、広大な原野を開拓して世界的な食糧不足に対応することも一つの目的ではあろうが、真の目的は、貧富の差の縮小なかんずく中産階級層の育成を図り、生活水準を向上させることにある。そのモデル経営を日本人移住者によって形作らせるために日本人が迎えられているわけであるから、移住者は「一攫千金を夢みたり、故郷へ錦を飾る」的な考え方、すなわち、パラグアイ人の生活様式や習慣を無視した経営をすると、平穏な生活をしているパラグアイ人の生活ベースを乱すことになり、それが高じて反日感情をいだかせたり、やがては排斥運動をおこさせることにもなりかねない。

移住者は、世界は一つの考え方にたち、日本人のすぐれた知識、技術をフルに活用し、パラグアイ国の産業開発に骨身を埋める覚悟をもってあたることが大切である。そのためには、パラグアイ国の歴史、文化、宗教、風俗、習慣をよく研究し、パラグアイ人と協力して、開発に取り組むことが必要である。

このような態度で開発にあたる時、やがてパラグアイ国民から、ブラジルにおける日本人のように、尊敬と信頼を勝ちとることができ、未来の国パラグアイで縦横無尽の活躍ができるものと確信する。

2. アルゼンチン国の日本人移住者の活躍状況

(1) アルゼンチンの産業と日本人移住の歴史

産業は、第1次産業に対して、第2次産業、第3次産業の比率は高いが、輸出における農牧産品の比率は70%を超え、アルゼンチン経済は農牧業によって支えられているといっても過言ではない。

土地の利用状況を見ると、農耕地17%、牧草地65%、山林12%であり、農耕地の面積が少なく、今後の開発が期待されている。

主要な農畜産物は、小麦、トウモロコシ、ブドウ、コウリヤン、牛、馬、羊等であるが、なかでも小麦、トウモロコシ、コウリヤン及び牛肉は、主要な輸出品であり、わが国にも多量に輸入されている。

鉱工業については、ペロン大統領時代から工業化に力を入れた結果、ようやく軌道に乗り、なかでも、自動車工業、弱電機器、繊維化学などの分野において、国内需用を満たすことができるようになった。しかし、重化学工業については、莫大な資本財の投入の必要や国内市場の貧弱さ等の関係から大きい進展は見られない。国外企業の導入についても、ペロン大統領の過去の経済政策から、労働総同盟と経営総同盟の合意による「社会協約」を基礎として進められたために、労働組合の組織及び発言力が極めて強く、企業の進出は容易でない。このような関係からわが国の企業の進出にしても、わずか数社にとどまっていることでもわかる。

アルゼンチンへの日本人の移住は、明治40年に始まり、戦前までに約5,400人が移住したが、これらの人々は限られた技術者及び近親者の呼び寄せ移民及び実習生であった

昭和13年以來、外国人の移住は全面的に禁止されたが、昭和32年に400家族の移住が認められ、昭和34年には、ミシオネス州にカルアベア移住地及びメンドサ州にアンデス移住地が建設されそれぞれ、84戸、26戸の農家が入植した。これはいずれも日本側の手によるものであった。このほかアルゼンチン国営のウルキッサ移住地にも12戸が入植した。昭和37年には、ブエノスアイレス市近郊の日系農家が独身者等の受け入れを始め、約500人が入植した。これらの青年は、徐々に独立したが、独立困難な青年のために、国際協力事業団では、立地条件のよい市近郊に独立用小移住地を5カ所建設し、独立を援助している。

この国に在住する日系人は約23,000人であるが、約70%は沖縄県人である。これらの移住者の職業はクリーニング業40%、農業37%、商工業23%であり、日本人といえば、洗濯屋さん、花屋さんで代表しているように、職業は限定されている。

(2) 移住者の活躍状況と将来の展望

日本人移住者の職業をみると、都市在住者は、タクシー運転手、洗濯屋、商売人及びアンマカ、農業移住者は、花栽培及び野菜栽培者が主体を占めている。いずれも日本人としての勤勉さと器用さを生かして、生活の基盤を確立している。現在、都市近郊の移住地で行われている花卉栽培は、北海道の賀集氏、愛媛の高市氏によってその基礎が作られたといわれる。この栽培は、小而積、小資本で経営が可能であり、しかも重労働を要さず、資本の回収も早いという利点をもつために、広く日本人移住者の間に普及していったものである。

コロニヤウルキッサの田中氏は、花卉栽培家としての中堅者であるが、総耕地面積は8ha、240㎡の温室10棟をもち、カーネーションと菊を周年栽培している。

これらの経営をわが国花卉栽培農家と比較してみると、経営規模は大きく、また、収入も多く経営も安定しているが、同国内の他作目経営農家と比べると、著しく経営規模は小さく、労働集約的で、投機性に乏しく、魅力の乏しいものとなっている。各移住者は、将来の発展を期して経営規模の拡大を図ろうと、自動灌水機や暖房設備の改善等省力化につとめているが、花卉栽培そのものの本質が、労働集約的なものからなりたっているために飛躍的な規模拡大は望めない。

花卉栽培による安定的発展を図る方策として考えられることは、市場の確保及び省力化による規模拡大並びに、労働力の確保であるが、市場については、国内及びヨーロッパ諸国の需用増大によって安定しているものの、労働力確保については、現地人の労働条件等によって容易ではない。また、現在の花卉栽培は、一世の勤勉性と研究によって支えられ、軌道に乗っているものの、将来の問題として、2世、3世は現地の教育を受け、社会の生活習慣にとけ込んでいるため、年中無休の花栽培からは次第に遠ざかって行くことが予想される。このようなことを考えた場合、花卉栽培や野菜栽培は日本人移住者の体質に適した作目ではあるが、いずれも、経営的に安定性に乏しく、一大飛躍を望むことは容易でない。とくに、世界的な食糧不足が問題となっているとき、日本人の手によって広大な土地に、食糧作物や永年作物及び牧畜を導入した経営に転換して行く必要がある。

移住者の水野、鈴木、安藤氏は、この点に着目し、すでに牧場経営に意欲的に取り組んでいるので、近い将来、日本人の手によるりっぱな牧場が見られるようになるであろう。

(3) 移住を志す者の心構え

アルゼンチンの住民は、自国を、南アメリカにおける唯一の白人の国と自負し、文化、所得、生活水準が高く、他のラテン・アメリカをリードする国であるとのプライドをもっている。ところが、現在他のラテン・アメリカに比べて、産業、経済等の開発が不活発なのは、過去の政情不安に原因があり、政情さえ安定すれば、経済活動は活発になってくるものと考えている。

視察して感じたことは、ブラジル、パラグアイは、都市においても農村においても、土を掘り返し工場をたて、活気に満ちた国であると感じたが、アルゼンチンは落ちついた雰囲気、換言すれば、活

気のなさがとくに感じられた。これは自国の政情不安からきているのか、静かな国民性に関係あるのかその原因をつきとめることができなかった。

隣国のブラジル、パラグアイが意欲的に開発に取り組んでいることを考えれば、この国においても近い将来、すべての産業の開発が活発に行われることが予想される。その場合、わが国の技術援助や経済援助が、開発の鍵をにぎることになるが、他国からの援助によって進められることについては、国として、国民としてのプライドが許さず、種々な経緯をへて開発が進められようが、なにはともあれ、アルゼンチンは広大で肥沃な国土と、豊富な地下資源をもつ潜在力のある21世紀の国である。アルゼンチンに移住するにあたっては、農業移住、技術移住のいずれを問わず、アルゼンチン国民と相協力して、この国の産業経済発展のために尽すのだという謙虚な態度と、この国に骨を埋めるのだという覚悟で協力すれば、やがては途が開けるであろうと考えられる。

ベレン・マナウス

茨城県立石岡第一高等学校教諭 桜井徳郎

[1] ベレン・マナウスにおける日程

8月6日 ブラジルよりベレン空港へ 午前1時30分到着 ホテルパンジ+宿泊

- ・同ホテル6時30分出発 コバス飛行場へ
- ・同空港9時30分離陸 トメアスー10時着陸
- ・農場見学 真木卓朗氏（茨城県出身）
- ・第2トメアスー事業所 トメアスー産業組合訪問
- ・トメアスー15時30分出発 ベレンへ

（夜）ベレン市内見学 海外移住事業団ベレン支部および領事館主催歓迎会

8月7日 ベレンよりマナウス空港へ 午前10時10分到着

- ・事業団マナウス支部訪問
- ・市内観光およびアマゾン川の見学
- ・マナウス空港15時15分離陸 メキシコへ

[2] ベレンと第2トメアスー移住地の見聞と感想

私が当地の調査報告を特に希望したのは、当初の計画によると4日間の滞在期間があり、6名の教え子達が活躍するトメアスー移住地の実態を直接見聞したかったことと、以前からアマゾン流域の農業には魅力と関心があったからである。

しかし、出発直前になってマイアミ、ベレン間が飛行機の突然欠航という事態のために止むなく日

程が変更となり、それが為ベレン、トメアスーは1日、マナウスが約4時間という極めて短時間の視察で、ハードスケジュールとなった。大きな期待をかけていただけに残念でならなかった。

しかし、現地の事業団の方々のご高配と献身的なご指導およびご支援によって、初期の目的がじゅうぶんとはいえないまでも一応達成できたことは非常に喜んでいる。

ただ、この報告内容については、短時間における見聞記そのものなので、あらかじめご了解をいただきたい。

(1) 第2トメアスー移住地を訪ねて

赤道直下世界最大の都市ベレン市(人口73万人)から南に約120kmのパラー州トメアスー郡に第2トメアスー移住地がある。4時間余りの睡眠だったが、十数年ぶりに会い教え子を考えると夢中でとび起きホテルを6時半に出発し、(エアータクシー、テコテコに乗るため)飛行場へ行く。

ところが、霧のため視界がわるく2時間程待ちぼうけをくわされたが、小型飛行機2台に分乗し離陸した。

眼下には、アマゾンが蛇行し、ジャングルが果てしなく続き想像を絶する広大な緑の樹海の中に、ところどころ原始林を伐採して焼いて立ちのぼる煙や開墾地が見えた。約30分位でトメアスー移住地の飛行場に着陸する。事業団の方々はじめ各県の大勢の人に出迎えていただき、その中に元気な4名の教え子を見つけ、感激のあまり万感胸にせまり声をつまらせながら固い握手をかわした。その手からは意欲と実践力が感じられ、自信にみちあふれた様子で一応安心した。

(2) 真木農場見学

真木卓朗氏は、茨城県日立市の出身で27才の現代的な青年経営主である。渡伯後数年にして先般親子で訪日したという成功者でもある。

渡伯の動機を伺うと、日立一高在学中は進学希望だったが、ふと生きがいのある仕事をしたいということで、農業に経験のない真木氏が、しかもアマゾンの農業に賭けたのだそうだ。

詳しいことは時間の関係で聞くことができなかったが、ビメンタ畑を見る限りにおいては、計画的に経営拡大をはかり、仕立方等も研究的に行っており、意欲と実行力は抜群ですばらしい実績を上げていた。

今後一層の発展に期待したい。

(3) 車窓から見る移住地

道路は拡張工事が進められており整備されつつあるが、舗装は完全ではなく砂塵は車の中まで入り体中褐色になってしまう。

途中に見るビメンタ畑の中には、(第1トメアスーに多い)根腐病による生育不良株や枯れてしまっているものも見られ気の毒である。早く対策を立てて欲しい。

(4) 第2トメアスー支部および産業組合訪問

第2トメアスー事業所の八重尾所長さんより移住地の概況説明があり、第2トメアスー移住地は昭和36年で総面積25,000haを有し、入植者は80余家族が入植し頑張っている様子を伺った。なお隣接の第1トメアスーには230戸が入植しており、着実に営農を進めているとのこと。両移住地ともビメンタ中心の農業経営で栄えているが、最近ではビメンタに病害が出はじめ、単作の危険性を排し、万一の場合に対処できる農業をという考えで、熱帯地の特性を生かした作物と肉牛の導入をはかる農家が増えつつあるとのことである。

産業組合では、ご挨拶程度の時間しかとれなかったが、組合前の福原八郎翁の記念像をみると、トメアスー植民地へ1929年に43家族が入植して以来、45年の才月が流れたが、その間変転極りない時代に掉して今日に至った、アマゾン開拓の歴史を秘め、発展をとげた移住地を見守っているように思われた。トメアス移住地の今後の発展と皆様の健康とご多幸を祈り別れを告げた。

(5) 夕方のベレン

ベレンの街は、近代的な高層ビル街と植民地時代の古い寺院やポルトガル風の住宅が建ち並び、街路樹には大きなマンゴの並木が続くのが印象的である。

夜は、領事館とベレン支部の皆様による歓迎会があり、有意義な1日でした。

[3] マナウスの印象

マナウス支所長さんよりマナウス市の一般概況、自然環境、社会環境や日系人の活躍状況、現地の農業事情等について説明をうけ、短時間ながら市内見学をさせていただいた。

マナウスは、アマゾナス州の州都でアマゾン河口のベレンから1,400km上流にあり、緑の秘境アマゾン観光の拠点となっている。マナウスは19世紀の初期に世界最大のゴム集散地として一大栄華を築き、現在は2000トン級の大型船が出入りできるブラジル第一の河川貿易港で商業都市として発展している。また、ブラジル唯一の自由港として外国商品が無税で売られて観光客の人気を集めている。市内見学では、ゴムブームの殿堂、アマゾナス劇場と、アマゾンとネグロ川り合流地点のすばらしい光景が印象的だった。

アメリカ合衆国

佐賀県立埴田工業高等学校教諭 中島哲太郎

8月8日、昼前、我々を乗せたメキシコ航空ボーイング727のジェット機はメキシコと合衆国の西部国境附近の上空を飛んでいた。機窓よりの鳥瞰はよくきゝ山や谷、特に土砂の流出浸蝕状態が手をとる如く眺められた。又山岳にも谷間にも一面砂漠状にて草木のしげみをみる事が出来なかった。丁度正午ロスアンゼルスの上空に達し上から見下ろす街の状況は道路が縦横碁板の目の如く整備されて苗味みないだ。一軒一軒の住宅には樹木の植込が良くなされていた。

出迎えてもらった副島次一氏（佐賀出身）に懐古談を聞き、呼びよせの少年時の事、戦時中の敵国人として取扱われた時の苦勞話、又日本人の優秀性、二世の頭の良さ教育程度と活躍状況等ポツポツと話してくれる氏の話には実感がこもっていた。ガーデナーに連れられて「さくら」にて夕食。静かなたゞずまいの店若くて美しい日本人ウエイトレス、耳ざわりのよい日本語。半分は日本に帰った感でくつろいだ。翌9日市内を見学。歯ぎれの良い口調のガイドマン重川氏のフォードキャデラックの素晴らしい車にて案内してもらおう。市の中心街、そこに東京銀行はじめ日本の都市銀行の殆んどが建ち並んでいたのには驚かされた。領事館にて挨拶し、リトルトーキョー、オルヴェラ広場、そしてフリーウェイ（ハイウェイ）にて北西のオックスナードへと急ぐ。重川氏の話しは続き、気候温暖で生活がしやすいこと、沿道の山は禿山、わずかな雑草がその表面をおぼっている。年間降雨日数15日、降雨量わずか180mm、700kの遠距離をグランドキャニオンより送水し給水、人口670万の大都市を支えているとのこと。走っているフリーウェイは加州のガソリン利益にて作られ通行料なし、ゴーストストップなし、片側3車線にてその左右に車寄せが作られたものである。

オックスナードに着き早速見学、この農場は4名の共同経営にてそれぞれ農場・集荷処理・会計・渉外の係を分担しておられるとの事。当の園崎氏は出張中にて不在だったが、最初集荷場の模様を梶原氏より説明を聞く。トマト・キュウリをワックス処理し箱づめがなされていたが、キュウリの太いこと。大型クレーン・トラックは横づけされフロリダをはじめ全米各地に送られ遠くカナダにまでとゞけられているとのこと。次に近くの農場を見学、井野氏より詳しい説明を聞く。広々たるキューリ畑一畝は地を這っている一では収穫がなされていた。トマト畑には実がたわゝになりさがり、今日最初の灌水をしたとのこと。重川氏が自宅の裏庭に数本のトマトを植えて「毎日水をやっている」と言ったのに対し、「Much water, tall tree, No fruit/」との井野氏の返事に皆大笑いであった。この間説明や質疑応答は日本語と英語のチャンポンでなされていた。又灌水用の配水パイプの大きいこと、直径20cm位だったろうか。最後に2k程離れたセロリ植付の模様を見せてもらおう。広々たる畑はそびえるユーカリの防風林にて区画され、作業は大型トラクターにて牽引される植付機にて7人が後ろむきに坐わり、苗を一本づつ狭くくわしてゆくもので珍らしかった。この附近は海岸

に近く地下水をふんだんに汲上げていた。この国崎氏は未だ45才年配にて、十才にて両親を亡くされたが、苦学力行現在は農場と宝石鉱山を経営、屈指の億万長者とのこと。その経営方針は従業員を大切にす、又会社株をその人達に分与する、というもので従業員の人達は良く働くとのこと耳にした。

帰路は西海岸を南下した。夕陽の沈む太平洋が奇麗でサンタモニカ海岸は山手に高級住宅、海岸には多数のキャンピングカーを眺めてのドライブであった。その人達は水泳に釣りに夕食の準備にと全く余暇をエンジョイしていた。

翌10日は懸賞作文入賞の中学生荒田君、高月さんの2名と合流し、広大な敷地の加州大学ロス校舎、ベバリヒルの高級住宅地、ファーマーズ・マーケットの珍しい民芸の品々、2万5千人収容のハリウッドボウル(野外大音楽堂)それにディズニーランドを見学してまわった。

11日正午前ホノルルに着く、ボーイング747ジャンボ機にて丁度船に乗っているみたいで、揺れることもない、離陸時にはこんな大きい胴体が飛翔出来るだろうかと思っていたが、飛行中は安心至極だ。小雨模様の天候にて霧雨がふっていたし、午後一行はホテルにてゆっくりと休養をとる。

翌12日は快晴小林観光の車にて市内及び郊外を見学してまわるも、この島の住民の26%が日系人にて占めている上に、夏休みのせいもあってか、空港、海岸、土産品店、ホテルいづれも日本人観光客にて一杯である。市内の街路わき、住宅庭園に咲くブーゲンベリア、プリメリア、ハイビスカスの花が奇麗だ。全く街全体が花園である。国立墓地にては、米軍戦死者の冥福を祈り、真珠湾の軍港を眺めては当時の連合艦隊の勇壮さを思いおこし、複雑な気持ちでいつまでも立ちすくんでいた。夕方JALのエアバスに乗り込み、これでホッとす。機内放送とて耳をそばだててきく必要もない。スクリーンには映画「ムツゴロウ夫婦」が映し出されている。音楽もクラシック、ポピュラー、日本のりた、名人会まで色々に流されている。我々を乗せた001便は夕暮れの洋上を西へ西へと進み、いつまでも暮れようとはしない夕陽と共に、東京へと飛びつづけていた。

視察ア・ラ・カルト

兵庫県立豊岡農業高等学校教諭 植木 暢 久

◎時差と時差抜け

地球は24時間で1回転 $360 \div 24 = 15$, /時

従って経度15度で1時間の時差。

東経どうしの地点一経度大抵ど時刻早い。

東経西経の地点一東経の地点が時刻が早い。

西経どうしの地点一経度小ほど時刻が早い。

日は変更線東に向って通過（東経→西経）日は遅らす

日は変更線西に向って通過（西経→東経）日は進ます

地理の教科書の記述はわれわれ熟知していたが、なかなかこんなことで時差が理解できたなんぞとはいえない。時差と時差ほけを今度はじめて身体で理解し得たように思う。

羽田発 21日 20時30分、ロスまでの所要時間9時間で、出発のままの時計で22日午前4時30分で朝食、ロス着が現地時間で21日午後2時45分、給油待時間のねむいことねむいこと。塔乗後午後7時に夕食、午前0時30分また朝食、リマ空港着が午前1時40分、これが現地時間で3時30分、再び給油、所要時間約4時間半でリオガレオン空港着、これが現地時間で午前11時。つまりほぼ25時間を経て南米入りする間に、短い夜を2度すごして日付が1日くり下がるわけで、南米入り後の数時間団員一同「ねむい」「ねむい」の連発、もしぐっすりやると人がねる頃に目がさめてこれまたどうしようもない有様、これがいわゆる時差にとともなり「時差ほけ」ということをはじめて実感で理解した。

今度は帰路、ホノルル空港を8月12日の午後4時30分に出発、7時間ちょっとで羽田着、だからそのままの時計で午前0時近い、この時刻が日本時間の13日午後8時だから、これ又ねむいわけ。帰国後はしばらく午後7時～8時ねむくなって午前4時頃に目がさめてしまう。これも又時差ほけのなせるわざ。

帰国後この体験を地理の時間報告すると、生徒の時差への関心がかげん高くなって、理くつなく身体でおぼえることを再認識させられ、日頃の授業反省の事例になった。

◎食事と健康

所変ればなんとやらで、とに角日本食から一変して肉食中心の食生活にきりかわるので、団員のコンディションもさまざま。飛行機は乗るたびに必ず食事。直航便の往路などはこちらの状況おかまいなして4時間おきに食事、食事、食事。

例えば羽田発後の夕食は肉、寿司、ライス、パン、クラッカー、ケーキ、コーヒー、夜中4時半朝食、ベーコン、オムレツ、パン、コーヒー、リンゴ。はじめうまいうまいと食べつくした食事も、ねむいのと運動不足とで次第に食べ残しが多くなる。機上食はとにかく、日常食はすべて肉、肉、肉、しかもボリュームが多い。焼肉など皿の上の一片が400gはあろうか。サンパウロ郊外オランブラ見学の途中立寄ったドライブイン「jardim」で焼串にさした大きな肉をボーイが目の前で皿の上に切り落とす。1回だけかと思ったら豚肉、鶏肉、最後シュラスコで、これが当店の定食ですという。概してブラジルの牛肉はかたく歯ごたえがあり、歯の悪い人かでかけるときは事前に治療の要あり。それに比べるとブエノスでの肉はやわらかくてうまい。「グラシマス、エスターバ、ムイ、ペン」(どちそうさま)という焼肉の調理現場を見せようと案内までしてくれる。われわれこそ食べ残してい

るが、周囲を見るとすべての人がほとんど食べ残していない。実によく食べ、よく飲み、よくしゃべる。1日2回食が普通で朝は殆んどコーヒーだけだというのが、特に夜の食事は充実している。ブドウ酒を飲むこと、ゆっくり時間をかけて、しかもわいわいしゃべりながら食べるというのは、実は食欲増進、消化をたすけるということにつらなって、実は食事と健康が見事にバランスがとれているように思える。我々の食事は大体が「あっさり」「早く」という習慣が身につけてしまっているが、日本人の食生活は特に食事の仕方という点で今一度反省してみる必要があるのではなからうか。事業団、或いは県人会とも割合日本食が食べられるようご配慮をいただいたが、イグアスだったか、各人それぞれ体調を告白し合ひ中で、「日本食を食べてやっとスッキリしました。(〇〇〇)の色が本来の色になってほっとしましたなあ」というA先生のことばにみな大笑いとなった。

移住者の資格は先ず健康であることということは聞きなれてはいたが、これは気候よりなにより、食生活の転換にたえ得ること、つまり現地の食生活をこなせる体況、現地の食事が好きになる健康が必要だということだと思ふ。サンパウロの援護協会でBさんから若い人がへたる傾向がでてきている、健康をそこねたらなにもかもおしまいだ。というお話を承ったことは重要なことだ。ころみみ、盲腸の手術は日本円で10~15万、帝王切開は30~40万かゝり、1ヶ月の入院費は半額になっても1200クルゼーロ。健康であることはなにもまして重要な資本だということが理解できるわけだ。

◎海外移住事業団から国際協力事業団へ

出発前に本部で「みなさん帰国されたら看板が変わっていますよ」という話で「そうですねえ」となるとなくいっていたが、いよいよ名称変更直前の7月31日はブラグワイのアスンシオンであった。職員の方々は「今夜は解散パーティで、明日は門出の又パーティですよ」と笑っておいでだったが、日本をはなれて、ようやく海外移住事業団の組織の大きさと行動半径を思い知らされた。その活動は文字通り移住のAからZまで、農業はもとより商工業から流通機構、外交にまたがり具体的には、教育、文化、金融あらゆる面でその国と移住者を結ぶ、移住者の生活のすべてを分担している。各国領事館大使館との連繋は勿論、栽培作物の特性、地域性、或いはその地の地理、風土、文化の特徴など、案内していただくたびにその体験と知識の豊富さに舌をまいた。車中での話のすべてがメモに値し、「もっとゆっくりしゃべって下さい」とか「外を見るひまがないので、時折は車をとめて写真を撮らせて下さい」などと勝手なお願いばかりしていた。ブラジルの中核であるだけに、まさに雑々の入りまじり(団員の中でオーバーからパンツまで一町でみかけた色とりどり雑多な服装を見て一こんな表現がぴったりだと誰かがいった)の中で活動されているリオ、サンパウロの支部、代表部、アスンシオン、ブラジリア、ベレンの各支部、まさに前線基地の感深かったイグアス、トマス、マナオス各事業所、ロス駐在所などみなさんの顔はまさに活動の顔そのままであった。それが移住者にとってどんなに支えになっているか。それを思うと、日頃我々が教育現場の悩みを克服できないでいることはまことに不甲斐ないことといわなければならない。

「ジャミック」といえば知らない者はないのですが、名称が変わるとその国への登記など、法的な手続きが必要なのでまためんどろなですよ。今後は又新たな業務が加わって行動半径は一層ひろがるでしょうね」とのことだったが、その自信と確信に頭が下る思いがした。在外事務所のみなさんのご健康を祈らずにはいられない。

◎ことば、両替、レートなど

旅中残念に思うのはことばが通じないこと、ひとえにこれは我々の学習不足であり、日本人の語学の不器用さが通感せられた。ことばが通じないことは意志が疎通しないこと、そこからは人間のつながりは生まれえない。事業団の方々、県人会の方々のおかげで、我々団員とくにどうしようもなく困ったということにはなかったが、ポルトガル語、スペイン語は勿論、英語すら満足にしゃべれない、通じないのは残念というよりなげなげな思い。サンドウィッチだけはわかったが、ちょっと他のものになるともうだめ、食事の注文でもできずに、前の人の食べているのを指して「これと同じ」といってもなかなかわかってもらえなかった。一度だけ手荷物の検査で、「これは私の身の廻り品です」と会話集を手にしてしゃべったら、笑われたけれどもきびしい検査は免れたことがあった。

我々さかんにいったのは「オブリガード」「ムイトブラゼール・エン・コネセーロ」「カウントエ?」「リンドイヤー」「セルベージャー」「くらのもの。やはり最低、相手のいっていることが見当がつくくらの会話実力は持っていたいもの。

ロスアンゼルスで、公衆電話のかけ方がどうしてもわからない。15セントだと聞いて投込むと戻ってしまい。何度かしているうちに交換手の声、それが又わからない。「サッパリワカラヘンワ」と隣のY先生にいったら、交換手に聞えたのか「5セント入れてダイヤルして下さい。そして5セントといったら又5セント入れて下さい」とはっきりした日本語。英語も話せない日本人と、日本語がしゃべれる交換嬢と、これは一体どういうことかーと私はいいたい。

その国のお金にかえる両替という作業は旅行者必須の作業である。どの空港でも、どのホテルでもちゃんと両替はしてくれる。ところが日本のように今日のレートはいくらいくらですとは表示していないから、場所によってレートがずいぶん違う。例えばサンパウロで、事業団の方からそれを教わってお願いをしたら100米ドルが805クルゼーロになった。ところが同日ホテルで両替したN先生は650クルゼーロで155クルゼーロの差ができる。しかもその差額は少々ではすまないことさえある。たしかなところでレートを確かめ両替をしても、「今日はいくらの筈だが」「くらの確認ができるようであればならない。ところが国から国と移動する程にますます混乱。あとで考えるとずいぶんごまかされている場合が多い。イグアスからアスンシオンに向うバスの休憩昼食で、バラグワイ紙幣で支払って、クルゼーロのおつりがあった。ペソとクルゼーロの計算をまたやり直すというよりなわけ、研修派遣教師団の会計係のY先生S先生、夜はベットの上でそんな計算ばかり。大変ご苦労なことでありました。

◎日本人学校

サンパウロ郊外に新校舎成りつつある日本人学校を訪ねた。生徒たちの生き生きした生活ぶりに感銘を受けたが、学校経営、運営といった点で、校長さんや事務長さん、職員の方々のご苦勞のほどが察せられた。例えば、ブラジルの学校認可を得るためのボルトゲス、公民、地理歴史というカリキュラムの問題、外務省派遣職員である日本からの職員と現地採用の職員のチームワークの問題、都立入試に間に合わせての12月卒業、授業時教確保の問題、特にゆとりがあると思われない給与、住宅手当など、フランスコジャベールの分校としてより名実共に独立させたいという願い。足りない備品、教育機器、父兄負担、通学バスの問題など……「陳情はしていますが、このインフレの中では……」と校長先生。

ブエノス・アイレスでの歓送会の席でやはり日本人学校の話になった。8年前だったかドゴール大統領がこの国を訪問した置土産は学校であった。フランスが全額出そうという話だったがアルゼンチンの主権侵害にもなりかねないと、結局国も負担することになって財団が設立され完成を見たという。「日本はそういう意味では先進国とはいえません。当地の学校数は戦前のレベルまでも回復していません。この状態は移住政策にも影響しています。学校の理事会は頑張ろうと決意はしていますが、負担は年々増大してきます。こういう声を聞くと、日本の対外的な文化交流、或いは経済援助は、まだまだ形式的であり貧弱だといえそうだ。

従来の日本の対外援助はすぐ見返りを求める援助だと非難された事を思うにつけ、これからのあり方は一考を要するし、相手国との交流についても経済的評価を先にするといったきらいはなきにしもあらず。あらゆる国に対して、もっと文化的な評価にもとづく交流がなされなければならないのではないか。

◎これからの移住についての私見の一、二

サンパウロでの移住懇談会で、サンパウロ大学の斉藤広志教授と、サドキン電球工業社長、山本勝造氏が出席され有益なお話を承った。山本社長は私の同県のご出身でことにいろいろ予備知識もあったのでそのお話はずばり「ブラジル社会学」であった。斉藤教授は日系社会が、1世2世3世と世代が交代する中で、現況の農村社会の変質を明確に指摘された。たしかに日本人は農業でブラジルに貢献した。例えば、新しい農耕形式と栽培作物、農業協同組合の運動、これらはみな日本人が持ちこんだ。しかし日本でもそうであるように、ブラジル社会でも流通経済の中で農業はわりの合わないものになりつつあるのではなからうか。一統計で65%の離農、平均転居7回というものもある。「私も離農者です」と山本さんはいわれる。県入会でも、「農業移住の時代は終了しましたよ」という声を聞いた。しばらくの滞在では私なりの明解な判断はとてもできないけれども、ただその後、イグアス、アスンシオン、ブエノス・アイレス、ベレンとコースをたどり、その地、その地での移住の問題にふれながら考えたことは、これからの移住は科学的・専門的でなければならないのではないかということ

であった。つまり今までの私は、移住は農業移住と技術移住で、それに共通する健康とか精神力とかいったものだけを強調していたのではなかったか。勿論これは間違いでなかったけれども、これからは、そのケースに応じたより具体的で科学的な移住を考えなければならないのではないかということである。更にいえば、これからの移住者に要求されるものはより深いブラジル社会への認識と理解、より高い技術、専門性ではないかということである。ブラジル日系人はブラジル人であること。真の定着とは、そのことにほかならないのではなからうか。

海外視察のまとめ

静岡県立盤田農業高等学校長 藤田良明

海外視察が単なる見聞旅行に終わってしまうことのないように、その成果を若人の教育に役立てるために一つのまとまった考え方を集約的に結論として出したいものだと、いろいろ想定をめぐらしながら旅行を続けました。

パラグアイの国際協力事業団アスンシオン支部の事務室で堀口総務課長さんから、パラグアイの諸情勢の説明を聞いている時、壁に前大平外務大臣のかかれた色紙『着々寸進、洋々万里』を見て、非常に感銘を受け、この文句を拡大解釈して、構想的な結論を得たのが次のようである。

「洋々万里、強々自立、着々寸進、常々謙謝」以下この文句を軸として、海外視察の成果をまとめることにしたい。

1. 『洋々万里』

パラグアイのイグアスからアスンシオンまでは、飛行機をやめて高速バスに乗って、四曲の状況をながめながら旅行することになった。雲の彼方まで続くかと思われる大原始林、大平原、その中の延々たる一本道。バスは時速120Km以上の猛スピードでひたはしりに走る。

肉牛の大群があちこちにいますが、大海の鯨の群のようにしか見えない。正に洋々万里の光景である。それは、サンパウロ附近でも、アマゾンでも、またアルゼンチンでも、南米のいたるところで見かけた、全く日本では見ることのできない桁ちがいの広い、広い原野の姿であった。そうして、『ブラジルは広いよ』の日常の簡単な会話の言葉がいかに真実であるかを理解するにあまりあるものがあった。一方日本の国はいかに狭いかも痛切に感じるにたかくはなかった。

南米大陸の原始林地帯の樹木の生長は、旺盛そのものである。日本の風景を、『竹に雀』の墨絵にたとえるならば、南米のそれは、『天を突くユーカリの巨木に荒々しい大鷲がはばたく』油絵のようであるといってもよい。

南米には、無限の未知の世界がひろがっている。はかり知れない可能性が秘められている。新しい

天地を求めて勇飛せよ若人達。

洋々万里の大自然がまっているのだ。

2. 『強々自立』

リオデジャネーロ郊外のフンシヤール移住地には、大場勇さんの農場がある。移住してから12年、多くの苦難と失敗をくりかえしながらも、営々として築きあげた努力の結晶としての農場は実に広大で、充実している。

ゴイヤバも自力で品種の改良を試み、アバカチも山の斜面に計画的に大きく増殖する等、長期の見通しもでき、明るい希望にもえた毎日の農作業にも一段と力が入る。長男の大葉勇治さんも後継者として満足そうに農作業に励んでいる。

強く、たくましく生きぬいて、自分で自分の道を開拓した栄光ある大葉さんの姿に対し、案内後の国際協力事業団の職員、中村博幸さんは、『大場さんは移住地の宝です』と表現しておられたが、ほんとうに良い言葉であると思った。

パラグアイのイグアス移住地には、未開の大原始林がひろがっている。開拓の斧の音が密林の奥ふかく吸いこまれて行く。あちこちに畑をやく炎が天をこがすように見える。近代的試験設備を充実した総合農業試験場、献身的な奉仕をされる医師のおいでになる診療所等将来の見通しのもとに、支援的諸条件の整備が急ピッチにととのえられている。

そうして、情熱の人、移住者の神様とあがめられている指導者、国際協力事業団後藤真一所長がおいでになる。そんな中で、電気もない不自由さに、じっと耐えながらも、不屈のたましいに、希望を胸にふくませながら強く強く生きぬいている開拓者、Tomino Ishidaさんがいる。庭にはオレンジが一ぱい実をつけ、長男が広大な畑を一生懸命大型トラクターで耕作していた。やがて大きな幸がやってくるであろう。『強々自立』その前途をお祈りしたい。

イグアスの移住地は青年期のエネルギーを宝蔵する実に有望な未来の桃園境である。

アルゼンチンのベエノス・アイレスの郊外コロニヤ、ウルキツサーには先覚者田中善太さんが、カーネーションの温室栽培に大成功をおさめている。間口8mに奥行50mの大温室がたちならぶ中であって、品種改良の話に余念がない。世界の市場を相手にする田中さんは全く希望にあふれている。

南米諸国の人々は日本人に大きな期待をかけている。『真面目でよく働く日本人』

ポルトガル系、スペイン系、インディアン系といった異民族間の風俗習慣のちがいが、気候風土の特異性、四囲これみな試練を要請している条件ばかりである。そんな中での開拓。

それには我々の想像をはるかに超越した、肉体力と精神力が要求される。強い強い自己独立の精神、一切の依存的態度は許されない。それは自己の破滅を招くものになるものである。あくまで強く、あくまでたくましく自立あるのみ。その尊い気位が開拓者の輝かしい成功をもたらすのである。『強々自立』の精神こそ開拓者に必要不可欠の最大の根本的要素なのである。

3. 『着々寸進』

カンピナス市郊外の太田正一さん宅で一泊。農業開拓の昔話もきいた。『苦斗に苦斗を重ね、時にはマラリヤにかかって病死寸前にまでなった事もある。しかし頭張りぬいた月日があるのだ』と力強くお話しされた。バラ栽培の事業が成功、特に黄色のバラは他にその例を見ない貴重な品で、高価に取り引きされている。カンピナス市内には長女の方が主任になって花類の直売店を経営されている。生産から販売までの一貫経営で大繁盛である。『きょうは市内で結婚式がいくつもあるので花の注文が殺到している』と朝はやくから出荷がいそがしい。息子さんも後継者として希望に胸をふくらませて働いている。空地が広くあるので建築用のレンガ製造業をはじめようと目下準備中である。『呉を得て蜀をのぞむ』の感あり。心からご繁栄をお祈り申し上げます。いそがず、あせらず、『着々寸進』のたまものが今日の成功をもたらしたのである。

その日、隣りの農場の大橋和夫さん宅で昼食をご馳走になった。10 ha.のブドー園。よく手入れが行きとどいている。創意工夫が成功し、ブドーの早期出荷で大発展。もう押しも押されもしない大農園主である。大橋さんは静岡県立磐田農業高等学校(当時は中泉農学校)を卒業、早稲田大学に進み、鳥取県や公務員として農林行政にたずさわられたが、志を立てて南米にわたり、『着々寸進』努力を重ねられブドー栽培に大成功された。その他ゴイヤバも立派な園を作っており、二段三段構えの健全経営である。二人の息子さんも後継者としてファイト満々。ご長男夫婦の家も新築され、すでにお孫さんが3人もある。『幸せーばい』である。

ローマは一日にしならず。一步一步の着実な前進、一蹴一蹴の積みかさねが、万里の大原始林を開拓、美畑、美田をつくり、加えて創意工夫と決断力が大成功をおさめるに至るのである。

石の上にも三年といわれるが、南米では石の上にも十年であり、十年たつて南米になじみ、さらに十年たつて一端の事業家になる。その時には日本ではとても想像のできない、スケールの大きい大事業家となっているのである。『着々寸進』こそ成功への一里塚を教えしめしてくれるはげましの言葉である。

4. 『常々謙謝』

日本人が南米の国々で活躍できるのは、これらの国々の温い厚意によるものである。

パラグアイでもアルゼンチンでもこんな事を耳にした。『我々はいま平和に、何の不自由もなく楽しく暮している。それなのに何故日本人がこの平和な国に積極的に働きかけるのだろうか』南米の国々の人々は現在を満足しているのである。この言葉の意味についても考えてみることも必要と思われる。もし日本人が世界人類発展のための美名のもとに私利私慾をこやすような事を露骨にあらわしたならば、忽ち反日運動がおこり、撃退されるはめにおちいるであろう。

我々の先輩が命をかけて、原始林を開拓し、農業振興に貢献してきた。多くの艱難辛苦を克服して、あるいはコーヒーを、あるいは胡しゅう等を栽培、世界の市場に輸出し、その国々の国益に資するよ

りな大きな働きをしてきた。このような多くの事実は我々も知っているところであるが、真面目によく働く我々の先輩農業開拓者たちは、南米の国々の人々から、信頼と尊敬を得てきたのである。

黙々として、嘗々として自立し、謙虚に己を持し、南米の人々からよろこばれる日本人としてつくしてきたのである。

ブラジルには70万人の日系人がいる。農業開拓を母体として発展してきた日本人の中には、大臣あり、高官あり、軍人あり、実業家あり等々各方面に活躍し、しかも優秀な多くの働きをしてきた。

そうしてこれらの人々の心の底流には、謙虚にしておごらない、尊い開拓者の精神があるのである。我々は素直にこれらの国々に感謝し、世界人類の平和発展のためにつくす、日本人の真価を遺憾なく発揮し、常に謙虚に己を持し、南米の人々に感謝する気持ちをわすれてはならないのであり、そこに永遠の友愛のきずなが愈々かたく結ばれる事となると思うのである。

5. おわりに

『洋々万里，強々自立，着々寸進，常々謙謝』

これは南米視察から得た結論である。然してそれはまた、我々の現在の生活にも全くあてはまるよい教訓である。

次代を負う若う人たちは、大いなる夢とでっかい目標をもち（洋々万里）。強く強くやりぬく自立精神と根性をもって、人に依存することなく（強々自立）、しっかり脚下を照顧しながら一步一步、ローマにむかっての前進をつづけ、創意と工夫をこらすところにやがて雲のむこうに大きな幸せと成功を見出すであろう（着々寸進）、あせらず、屈せず黙々としてはげむ謙虚に己を持し、天地に感謝し、立派な人間として世界の平和を祈る（常々謙謝）態度と精神がなければならない。

全くいい言葉ではないでしょうか。

私は南米の視察を終えて、このような得がたい教訓を身をもって体験して参りました。

ほんとうに有難く、感謝しております。

海外研修派遣高校教師一覽表

	40年度	41年度	42年度	43年度	44年度	45年度	46年度	47年度	48年度	49年度	学 校 名 ・ 職 名 ・ 教 師 名
北海道											富良野市立富良野農業高校 教諭 通下岩夫
青森				○							弘前市立弘前実業高校 教諭 三浦 稔
岩手							○				県立江刺高校 校長 高橋利明
宮城								○			宮城県農業高校 教諭 石川謙三
秋田					○						県立鷹巣農林高校 教諭 成田節治
山形											県立上山農業高校 校長 枝松孝一
福島			○								県立岩瀬農業高校 校長 村田春男
新潟								○			県立加茂農林高校 教諭 皆川洋作
茨城		○								○	県立笠間高校 校長 加藤省三 県立石岡第1高校教諭
栃木			○								県教育委員会指導課課長 杉山 保 萩井徳郎
群馬				○							県立垂糸高校 教諭 萩原行雄
埼玉									○		県立熊谷農業高校 教諭 田辺鶴松
千叶							○				県立安房農業高校 教諭 渡辺 浩
東京						○					都立瑞穂農芸高校 校長 稲垣実夫
神奈川								○			県立平塚農業高校 校長 石川寿雄
山梨					○						県立機山工業高校 教諭 中島真人
長野									○		県立須坂園芸高校 校長 坂本勝三
静岡							○			○	県立磐田農業高校 教諭 山内正次 同校 校長 藤田良明
富山							○				県立上市高校 教諭 石坂久忠
石川								○			県立柳田農業高校 教頭 従二喜一
岐阜		○									県立郡上高校 教諭 鈴木義秋
愛知										○	県立安城農林高校 教諭 立川賢一 同校 教諭 岩本 肇
三重				○							県立名張高校 教諭 松本嘉一

近畿ブロック	福岡	井																	県立福井工業高校 教諭 酒井孫兵衛
	滋賀	賀								○									県立彦根西高校 教諭 山田 哲
	京都	都																	府立佳高校 教諭 齊藤 進 府立木津高校教諭 山本圭良
中国四国ブロック	大阪	阪																	府立国芸高校 教諭 金崎一夫
	兵庫	庫																	県立神戸高校教諭井島猛雄 県立豊岡農業高校教諭 植木暢久
	奈良	良																	県立郡山農業高校 教諭 森 敦貞
九州ブロック	和歌山	山																	県立橋本高校 教諭 稲田武彦
	鳥取	取																	県立鳥取商業高校 校長 谷本 威
	島根	根																	県立松江森林高校 教諭 妹尾信雄
	岡山	山																	県立天城高校 教諭 高田 浩二
	広島	島																	県立西条農業高校校長 森岡勉 私立広島大学附属工業高校教諭 相川忠久
	山口	口																	県立都濃高校 教諭 藤本俊輔
	徳島	島																	県立坂野高校 校長 中島圭之助
	香川	川																	県立石田高校 校長 矢野豊教
	愛媛	媛																	県立伊予農業高校教諭武智利博 県教育委員会高校教育課指導主事 高井昭男
	高知	知																	県立高知農業高校 教諭 立田好次
	福岡	岡																	県立久留米農業高校 教諭 橋本真太
	佐賀	賀																	県立伊万里森林高校教諭渡口未男 県立塩田工業高校教諭中島哲太郎
	長崎	崎																	県立藤早農業高校 教諭 真崎昭夫
	熊本	本																	県立天草農業高校校長 山崎憲一 県立熊本農業高校教諭首藤愛治
	大分	分																	県立宇佐農業高校 校長 外園 淳
宮崎	崎																	県立宮崎農業高校 教諭 桑畑孝司	
鹿児島	島																	峇院町立大村高校 教諭 東園 敏	
沖縄	繩																		琉球政府立南部農林高校 教諭 我部政照
計			2	4	5	5	5	5	5	7	7	7	7	7	9				
果	計		6	11	16	21	26	33	40	47	56								

国際協力事業団海外移住関係国内機関一覧表

機 関	〒	所 在 地	電 話
本 部	160	東京都新宿区西新宿2の1の1 (新宿三井ビル)	03 346-5311 ~14
(附属機関)			
海外移住センター	235	神奈川県横浜市磯子区西町16-5	045 751-1121 ~5
海外移住研修所	371-02	群馬県勢多郡宮城村大字柏倉字溝ノ口 4114	0272 83-3225
(国内機関)			
北海道支部	060	札幌市中央区北1条5の3 (北1条ビル内)	011 221-6661 ~6663
仙台支部	980	仙台市上杉1の4の28 (県上杉分庁舎内)	022 63-0795 61-7191
東京支部	160	東京都新宿区本塩町8の2 (住友生命四ツ谷ビル)	03 359-8281 ~4
横浜支部	220	横浜市西区岡野町2の12の20 (横浜渉外労務管理事務所内)	045 312-4961 ~4
名古屋支部	460	名古屋市中区丸の内2の4の7 (愛知県産業貿易会館西館内)	052 221-7103 ~6
大阪支部	530	大阪市北区堂島上2の38の10(京富ビル)	06 345-3621 ~4
神戸支部	651	神戸市葺合区御幸通り8の1の6 (神戸国際会館内)	078 221-6520
広島支部	730	広島市基町10の3(県自治会館内)	0822 21-7411
高松支部	760	高松市番町5の1の24(観光ビル内)	0878 33-0901
福岡支部	812	福岡市博多駅前2の9の28 (福岡商工会議所ビル内)	092 411-1846
熊本支部	860	熊本市上通町2の21	0963 53-4227
沖縄支部	900	那覇市西3の10の17	0988 68-0316 (代)

